大学出版

The Association of Japanese University Presses

No.127
2021.8
夏

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

［特集］**大学とスポーツ**

大学スポーツにおける光と影　**中澤 史**　1

野球と大学
——アマチュア野球の隆盛と職業野球の誕生を中心に　**鈴村裕輔**　8

箱根駅伝が生み出す付加価値と課題　**小野圭久**　17

大学でスポーツの包摂性を考える　**鈴木直文**　23

［新連載］**何年経っても忘れられない、編集者の一冊《2》**

板垣鷹穂『建築』　**木村公子**　表2

大学出版部ニュース　30

一般社団法人
大学出版部協会

何年経っても忘れられない、編集者の一冊《2》

板垣鷹穂著『建築』

木村公子（武蔵野美術大学出版局）

カバー写真は渡辺義雄撮影、銀幕スターのごとき板垣鷹穂（1934年）。ご長女の哲子様にアルバムごとお借りして、年譜にも写真を掲載した。帯文は長谷川堯先生による。本体表紙は大理石を思わせるサーモンピンクに、艶消しの金箔でタイトルと著者名を大胆に配した。こんな大きな金型は（懐事情により）もう作れないかも。ブックデザイン：白井敬尚　印刷所：精興社
［武蔵野美術大学出版局・2008年／菊判上製・448頁・定価5029円］

一九二九年、武蔵野美術大学の前身である帝国美術学校開校式で、記念講演「イタリアルネサンス」を行ったのが、三五歳の板垣鷹穂である。創始者、金原省吾の日誌には「板垣氏に相談」が散見され、新設美術学校の相談役のような存在であったことがうかがえる。戦前に華々しい評論活動を展開した板垣は、戦後その反動を受けるが、五九年には早稲田大学教授に着任。病没する六六年まで武蔵野美術大学で「西洋美術史」を担当した。

二〇〇三年、早稲田大学で開催された「板垣鷹穂シンポジウム」で、板垣の直弟子である髙橋榮一先生が「あるとき先生に、一番お気に入りのご著書は何ですかと伺いました。すると一言『建築』と。ちょっと嬉しそうになさるのです」と話された。ゆったりとした口調の髙橋先生の、そこだけ力を込めた「建築っ！」という語気がつよく印象に残った。

『建築』は一九三七年から五年間、岩波書店『思想』に連載したエッセイ四四篇をまとめ、四二年に育生社弘道閣から刊行された。パリオペラ座の「階段」に始まる建築逍遥。戦時の東京にいながら、心はヴァチカンに、ローマにと遊ばせ、かつて自らの眼で確かめたものを反芻する、なんと自由な旅だろう！　あるいは東京のオフィス街、歩くリズムそのままの文体も魅力的だ。

それにしても、地味な和風テイストの装丁。これを復刊するならば、と相談したのが白井敬尚さん。広い会議室に、板垣の著書をずらり並べ（髙橋先生の直弟子、酒井道夫先生のコレクションを拝借）、判型を検討するうちに、板垣の著書から数々の建築写真を引用掲載することなどが決まっていった。

もちろん最初に髙橋先生をお訪ねして、解説のご執筆をお願いした。復刊をたいそう喜ばれ、ご快諾を得たが、病魔との闘いから果たせず、丹尾安典先生が引き継いでくださった。年譜を編まれた安松みゆき先生の「髙橋先生らしいと思うんですよ。私たちに、こうして仕事を残してゆかれたのは」という一言は、今でも忘れられない。

特集＊大学とスポーツ

大学スポーツにおける光と影

中澤　史（法政大学国際文化学部・大学院スポーツ健康学研究科教授）

二〇一六年のリオデジャネイロオリンピックに出場した日本人アスリートの七二％が現役または元学生アスリートであった（日本スポーツ振興センター、二〇一六）。我が国のスポーツ史を紐解くと、野球をはじめとする多くのスポーツが大学から発展している。これまで国際競技力を有するアスリートや優秀なスポーツ指導者らの輩出源となってきた大学は、近年ではスポーツ医科学の有識者である教員や充実したスポーツ施設を用いて地域の活性化や社会貢献の一翼を担う重要な機関となっている。しかし、その一方で「学生アスリートは勉強をしない」などと揶揄されることがある。本稿では、このような大学スポーツにおける光と影に着目し、学生アスリートたちと接する中で見聞したエピソードやそれに関連する調査報告等に触れながら大学スポーツの実際について紹介する。

大学への入学経路

アカデミズムを志向する大学教育において、スポーツ推薦入学試験制度（スポーツ推薦入試）は異色である。一般的な大学入試では学部学科の特性に合った受験科目が設定されており、受験生はその試験に取り組むことになる。この入試制度は、入学後の学びに求められる学力を評価するという点において理に適っている。しかし多くの大学では、体育・スポーツ系ではない学部学科においてもスポーツ推薦入試を採用している。

スポーツ推薦入試は高校時代の競技成績に出願基準を設けた上で、書類審査、面接、小論文等による評価を通して学生を選抜する制度である。この制度は、多様な能力を持った学生を選抜するための一手段として、また体育会の活躍が大学にもたらすメリットという点で認知される一方で、

「学生アスリートは勉強をしない」「留年率が高い」といった批判を生む温床ともなっている。事実、「約四割の学生アスリートが文武両道の実践に困難を感じている」（日本スポーツ振興センター、二〇一四）、「約半数の大学が学生アスリートに対する学業支援を課題と認識している」（スポーツ庁、二〇一八）といった報告がみられる。

これには次の要因が考えられる。まず一九八九年にスポーツ推薦入試が公認されたことを契機として、多くの高校が体育科やスポーツコース、また強化指定運動部を設置することによって競技成績を上げると同時に進学実績の向上を図ったことである。スポーツ推薦入試経由で入学した一部の学生アスリートは、高校時代を振り返り、「週末や長期休業期間には遠征や試合があって勉強に割く時間はほとんどなかった」「授業の中に専門競技の実習が組み込まれていた」等とコメントしている。つまり、就学の目的がスポーツで実績を上げることにすり替わっており、本来の目的である学力向上が疎かになっている様子がうかがえるのである。

次に、一部の大学でスポーツ推薦入試の原型ができた一九八〇年代には、その対象者は「全国チャンピオン」「高校日本代表」といった一握りのトップアスリートのみであった。しかしこの入試制度は、一八歳人口が減少に転じた一九九三年頃から各大学の生き残り戦略の一環として積極的に採用されるようになった。二〇二一年度入試を実施した七六二大学を対象に行った調査では、スポーツ推薦入試を実施した大学は二四七校（全体の三二・四％、国公立：一・七％、私立：三〇・七％）あった。また、スポーツ推薦入試の非実施校の中で競技成績考慮型入試（多様な評価対象の中に競技成績を内包する入試）を実施した大学は一六一校（全体の二一・一％、国公立：四・三％、私立：一六・八％）あった。両入試をあわせると四〇八校（五三・五％）に達する（小野、二〇二二）。このことは競技成績も大学進学の一手段となり、社会もそのことを認知している現状を示唆している。一方で、このような実情は学力的には大学進学レベルに達していないと思われる学生アスリートの存在を想像させる。

学業とスポーツの両立

八尋・萩原（二〇一九）によると、大学生の八～一〇％程度が体育会所属の学生アスリートであり、私立大学に限定すれば、学生アスリートの二六・二％（男性：三〇・一％、女性：一八・三％）がスポーツ推薦入学者である。また、スポーツ推薦入試経由と一般入試経由の学生アスリートを比較した場合、スポーツ推薦入試経由の学生アスリートの学業成績が有意に低いと報告している。

この背景には、前述の要因に加え、大学での学生アスリートの専攻が必ずしも所属学部や学科での教育内容に合致していないという現実がある。栗山（二〇二〇）によると、スポーツ推薦入試経由の学生アスリートの多くが文系学部

に所属している。このことについて当該学生に確認したところ、「スポーツ系の学部に入りたかったが、受験できる学部が既に決まっていたので選択の余地がなかった」「高三の時に大学で何を学びたいとかは決まっていなかった」「顧問の先生に勧められたから入学した」というように、大学での学びや将来に対する明確なビジョンがないまま入学してきたため、学習意欲が低い学生アスリートが在籍していることは間違いないようである。なお、「顧問の先生に勧められたから入学した」というコメントは、主体性に欠ける学生の存在と顧問教諭の指導の在り方に対する改善の必要性を示唆している。

「自分はスポーツだけをするために入学した」という学生アスリートの存在も報告されている（朝日新聞、二〇一九）。このタイプの学生が関わっているかどうかは不明だが、毎年、学生アスリートと教職員がトラブルになる事例がある。規則を守らず遅れて「公欠願」を提出したため、それを受理されなかった学生アスリートが「なぜ大学を代表して試合をしているのに公欠扱いにならないのか!?」と主張するのである。これに対して「規則が守られていないため受理できません」と伝えると、「私は大学のために日々練習をして結果を残したのに、それを認めないとはどういうことか！」とまくしたてる始末である。こうなると、そもそも大学とは何をするところなのかという「そもそも論」から語らなければならなくなる。

勿論、大学での学びを深めたいという志からゼミ活動にも注力する、異文化体験を通した自己成長を目的として留学するといった学生アスリートも存在する。個人的な話題となるが、スポーツ心理学を専門とする私の授業を受講した学生アスリートが個別相談に訪れることは珍しくない。その内容は、競技場面での実力発揮、自己分析やチーム分析、チームビルディングといった競技力向上に関する内容から、チームメイトや指導者との人間関係の問題、進路や学業に関する相談と多岐にわたる。個別相談に訪れた学生アスリートのほとんどは四年間で卒業しており、中には海外の大学院に進学した学生や狭き門を突破して教員になった学生も複数名存在する。

昨今では、コロナ禍の影響により心身のバランスを崩したと推測される学生アスリートから相談が寄せられることがある。「部活動再開後、チームメイトとの距離感がわからなくなった」「競技場に行くと体が重い感じがしてやる気が出ない。競技のことを考えると苦痛であり、気持ちがへこむ。テンションが高い時や低い時がある。練習しなきゃって思うが悪いイメージしかでてこない」「競技場面で頭の中が真っ白になってしまい、視野がとても狭くなってしまう。焦りでかなりのストレスがある。以前のようにうまくプレーできない」。各事例とも長期自粛期間明けの練習時に心身のコンディションに不調をきたし、対人関係に関する問題や動作失調を訴えてきたケースである。当該学

生にはオンラインによる個人面接によって対応した。このようなコロナ禍における学生アスリートからの心理相談に関する事例報告は少なくない。そのため、身近にいる指導者や教職員、また家族や友人らによるソーシャルサポートは不可欠である。

「蛸壺現象」と呼ばれるものがある。これは同一の学部・体育会に所属する学生アスリートが常に行動を共にし、ほとんど一般学生たちと交流を持たない現象を指す。体育会に所属した場合、練習時間等の関係から必然的に同一の学部・体育会に所属する学生同士が同じ授業を履修する機会が増す。加えて、年間を通して多くの時間をチームメイトと同じ空間で過ごすことになる。この経験はチームメイトとの相互理解の深化やチームビルディングの一助となる反面、多様な価値観に触れる機会や交友関係の制限などにつながる。そのため、学生アスリートは一般学生とは異なる独自のアイデンティティを形成する傾向がある。競技経験のない一般学生と比較した場合、学生アスリートは協働力、感情抑制力、自信創出力、行動持続力等の対人基礎力や対自己基礎力に優れる一方で、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力といった対課題基礎力が低いと報告されている（日本スポーツ振興センター、二〇一五）。体育会活動を中核とするライフスタイルは、その良し悪しは別として、学生アスリート特有の心理社会的発達を促す機会となっている。このような現状を打開しようと、筆者ら指導者は、学生アスリートに対して一般学生との交流、地域貢献活動や短期留学への参加などを積極的に推奨しているが、学生アスリートたちの重い腰はなかなかあがらない。

キャリア形成

学生アスリートの就職活動には「体育会系神話」（東原、二〇〇八）、「アメフト神話」（松繁、二〇〇五）等があるが、就職活動において体育会出身者が一般学生よりも有利であることを示した明確な報告はみられない（松尾、二〇二一）。これまで筆者が関係した学生アスリートの多くは、キャリアセンターを活用し、業界研究、エントリーシートの作成、筆記試験や面接の対策等に一般学生と同等の時間と労力を注いだ結果、内定を獲得していた。あえて一般学生との違いを挙げるとすれば、それは体育会ＯＧＯＢによる支援の充実である。これは、特に歴史と伝統のある体育会における特権と言えるかもしれない。

スポーツ推薦入試を経て、その後の学生生活を順調に送る学生アスリートが存在する一方で、学業もスポーツも充実させることができずに卒業する者も存在する。スポーツ推薦入学者であっても、男性アスリートで1／3程度、女性アスリートで1／5程度の非レギュラーが存在する（東原、二〇二一）といった厳しい現実がある。特にスポーツ推薦入学者の場合、前述の理由から大学での学びに意義を見

い出せない者が一定数存在する。そのような状況において、ケガやスランプ、指導者やチームメイトとの人間関係の問題等によって思うように競技活動が継続できなくなると、残念ながら途中で退部する、場合によっては退学する者も少なからずいる。過去に退部相談に訪れた学生アスリートたちの中に「スポーツ推薦入学者の退部は退学を意味する」と思い込んでいた者が複数名いた。この場合、「複数ある入試制度の中のスポーツ推薦入試を活用しただけであって、退部するからといって退学までする必要はなく、このまま学籍を保持し卒業することができる」と助言したところ、ほとんどの学生が卒業していった。他方、退学を選択した学生は「退部したら競技が継続できなくなるし、友達がいなくなるから大学にいても意味がない」「チームメイトと顔を合わせると嫌だし、大学に居づらい」と語っていた。これなどは蛸壺現象による弊害と言えなくもない。一方で、これは特殊な事例となるが、学業との両立に困難をきたし留年したものの、アスリートとしてトップレベルまで達していたため、内定先の理解を得た上で企業に在籍しながら競技活動を継続し無事に卒業した学生アスリートもいた。

学生アスリートの支援

学生アスリートを取り巻く現状について概観すると「スポーツ推薦入試における学部選択の問題」「文武両道やキャリア形成の問題」「蛸壺現象に起因する問題」等が導出される。「学部選択の問題」については、大学における入試制度に対する教学面からの検討、また高校における受験生のキャリア形成を踏まえた進路指導の実施が重要となる。その際アスリートセンタードの理念に基づき、当事者である受験生の意思の尊重と確認が不可欠となることは言うまでもない。

「文武両道やキャリア形成の問題」「蛸壺現象に起因する問題」については、大学入学以前の教育指導体制の改善も必要となる。勿論、大学においても学生アスリートの学習やキャリア支援の体制を整える必要がある。これについては、二〇一九年に全米大学スポーツ協会（ＮＣＡＡ）に倣い創設された一般社団法人大学スポーツ協会（ＵＮＩＶＡＳ）との協同も一助となる。ＵＮＩＶＡＳでは「学生としてのキャリア」「アスリートとしてのキャリア」という学生アスリートのデュアルキャリアの支援も目的としている。既に複数の大学では、学生アスリートの学習支援を目的とした入学前教育プログラムやチューター制度等が試行されている。

加えて、学業とスポーツの両立、社会貢献活動、ビジネスマナーの指導等を通して文武両道を支援するトータル・パーソン・プログラム（人格形成プログラム）等も良質なロールモデルとなる。アメリカの大学で実績を挙げている同プログラムは、既に国内の大学でも採用実績がある。例えば、学生アスリートが部活動を継続するために必要な単位

数を設定するといった制度等が試みられており、スポーツだけに偏重することなくバランス感覚に優れた学生を育成するための施策が講じられている。「体育会系運動部所属者は在学中に学業とスポーツを両立しておくことが、協調性やコミュニケーション能力といった非認知的能力を含む社会人として活躍する能力の形成に結び付く」との報告（金森、二〇一八）に鑑みると、多角的な支援を通して学生アスリートの心技体に加え、知の側面の育成を試みることは有意義であると言える。

同時に、指導者の資質向上も重要となる。昨今では指導者による体罰やハラスメントが社会問題化している。このような問題の改善策の一助として、各競技団体主導による資格制度の充実や指導者・管理者セミナーの実施等が有効な手段となる。学生アスリートの支援では、学生自身に対する支援に加え、学生と接する機会が多い指導者の資質向上にも注力する必要がある。

大学は人生における一つの通過点である。ただし多くの学生アスリートにとって、大学は社会人としての準備を整える最後の教育機関となる可能性が高い。そのため、学生アスリートに対するワークライフバランスの涵養も大学教育における使命であることは間違いない。

文　献

朝日新聞（二〇一九）「運動部学生、学業は？」二〇一九年七月七日付、東京朝刊。

金森史枝（二〇一八）「大学時代の正課外活動における所属の違いが社会人生活の意識に及ぼす影響――体育会系と文化系との所属の違いに着目して」、『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第六四巻第二号、九三―一〇五頁。

栗山靖弘（二〇二〇）「スポーツ推薦の現状」、中村高康編『大学入試がわかる本――改革を議論するための基礎知識』岩波書店。

松尾寛子（二〇二一）「体育会は就職に有利か――日本の大学等新卒者の就職活動における体育会学生の特徴分析」、『体育の科学』第七一巻第二号、一〇三―一〇八頁。

松繁寿和（二〇〇五）『学歴主義の発展構造』改訂増補版、日本評論社、一二二頁。

日本スポーツ振興センター（二〇一四）「デュアルキャリアに関する調査研究報告書」https://sportcareer.jp/wp-content/uploads/2021/01/dualcareer_report_jsc_2013.pdf（参照日：二〇二一年五月二三日）。

日本スポーツ振興センター（二〇一五）「平成26年度文部科学省委託事業『キャリアデザイン形成支援プログラム』における『スポーツキャリア形成支援体制の整備に関する実践研究』調査研究報告書」https://sportcareer.jp/wp-content/uploads/2021/01/sportcareer_report_jsc_2014.pdf（参照日：二〇二一年五月二三日）。

日本スポーツ振興センター（二〇一六）「東京Jプロジェクト報告書」。

小野雄大（二〇二一）「『スポ推』の社会的意味を考えるために」、『体育の科学』第七一巻第二号、七八―八二頁。

スポーツ庁（二〇一八）「平成30年度大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要（大学）」https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/__icsFiles/afieldfi

le/2018/05/10/1404336_001_1.pdf（参照日：二〇二一年五月二三日）。
東原文郎（二〇〇八）「〈体育会系〉神話に関する予備的考察――〈体育会系〉と〈仕事〉に関する実証研究に向けて」、『札幌大学総合論叢』第二六号、二一―三四頁。
東原文郎（二〇二一）「〝スポーツ推薦体育会系〟の実像――〝一般受験体育会系〟との比較から」、『体育の科学』第七一巻第二号、九三―一〇二頁。
八尋風太・萩原悟一（二〇一九）「日本における大学生競技者数の2008年から2017年の推移――2020年東京オリンピック種目を対象として」、『スポーツ産業学研究』第二九巻第四号、二一七―二二二頁。

東南アジア史10講
古田元夫
【岩波新書】定価990円
ASEANによる統合の深化、民主化の進展と葛藤――ますます存在感を高めるこの地域の通史を、世界史との連関もふまえて明快に叙述。

アレクシエーヴィチとの対話
「小さき人々」の声を求めて
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ、鎌倉英也、徐京植、沼野恭子
私は耳の作家、魂の歴史家です――。ノーベル文学賞作家の創作の道のりと極意を多角的に明らかにする。
四六判・定価3190円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
http://www.iwanami.co.jp/

野球と大学——アマチュア野球の隆盛と職業野球の誕生を中心に

鈴村裕輔（名城大学外国語学部准教授）

はじめに

二十世紀の野球界の歴史を振り返ると、ある時期まで球界の頂点は大学野球であった。

より正確には、東京六大学野球を代表する名選手である立教大学の長嶋茂雄（一九三六—　）が読売ジャイアンツの一員として活躍した一九五八（昭和三十三）年、そして昭和天皇夫妻の台臨を仰いだ一九五九（昭和三十四）年になって、プロ野球は社会的な地位の向上と球界の盟主の座を手にすることになる。

日本における野球の歴史は、お雇い外国人として来日したホーレス・ウィルソン（一八四三—一九二七）が第一大学区第一番中学で英語や数学を教える傍ら学生に野球を教えた一八七二（明治五）年に始まる(1)。当初、野球は旧制中学、旧制高校の学生を中心に広まり、二十世紀に入ってからは早稲田大学や慶應義塾大学に代表される学生野球が中心的な存在となった。

これに対し、日本における最初の職業野球団である日本運動協会が結成されたのは、一九二〇（大正九）年のことであった。当時は、学生野球の全盛期であったが、その人気の過熱ぶりに対して批判が起き、入場料を徴収して試合を行うことが「商売人じみている」といわれるような時代でもあった。

それでは、アマチュア野球の隆盛とはどのようなものであったのか。今回は、野球害毒論論争や職業概念の拡張と野球選手の関係、さらに外来スポーツの中で野球が最も早く定着した理由、さらに多くのスポーツが東京から全国に伝播した理由を検討してみよう。

アマチュア野球の隆盛

米国から伝来した野球は旧制中学と旧制高校を中心として普及し、球界の主導権は第一高等学校を経て早稲田大学と慶應義塾大学が握るようになる。こうした状況がアマチュア野球の全盛期の到来をもたらすことになる。

アマチュア野球の隆盛は野球によって生計を立てるという意味における職業野球の誕生を遅らせる結果となった。例えば、一九一六（大正五）年に小林一三（一八七三―一九五七）が早稲田大学野球部で活躍した河野安通志（一八八四―一九四六）と市岡忠男（一八九一―一九六四）に対して、職業野球団の結成について打診し[2]、一九二三（大正十二）年にはすべての球団が鉄道会社により運営される「電鉄リーグ」構想を練っているものの[3]、結局は実現していない。

小林は鉄道事業を中心として都市開発や流通、娯楽など様々な分野に進出し、戦前の日本の経済界で重きをなした実業家であった。小林が職業野球の構想を抱きつつも球団の発足を実現できなかったという事実は、一九一〇年代から一九二〇年代にかけての日本の野球界におけるアマチュア野球の存在感の大きさを示していたと言えるだろう。

野球害毒論争にみる野球を取り巻く社会情勢

さらに、野球を取り巻く環境も、日本において職業野球の誕生や発展が進まなかった理由を考える際に見逃せない。

すなわち、社会の一部に野球は青少年の健全な育成にとって害悪であるという意見が根強く存したことは、野球害毒論争として知られる一連の論争が示す通りである。

野球害毒論争は、一九一〇（明治四十三）年十一月二十五日に東京朝日新聞が「野球の興行化」という題名の記事を掲載したことに端を発する。東京朝日新聞の野球批判は、一九一一（明治四十四）年に本格化し、春には慶應義塾大学の選手の素行を非難する記事を掲載する。さらに、八月二十日から二十四日にかけては、「野球界の諸問題」と題する記事を四回にわたって連載することで、野球に対する厳しい追及を行った。そして、八月二十九日には、野球を全面的に批判する連続企画「野球と其害毒」の掲載を開始した。

言論界を二分するかのような様子を呈した野球害毒論争は、最終的には「新聞のセンセーショナリズムにすぎな」[4]かった。しかも、一九一五（大正四）年に大阪朝日新聞社が全国中等学校優勝野球大会、すなわち現在の全国高等学校野球選手権大会を開催するに至り、人々の野球に関する興味と関心は一層の高まりをみせることとなった。

だが、この論争の過程で「巾着切の遊戯」「野球は卑賤なり剛勇の気なし」、「選手は作法に暗し」といった批判が起きたことは、野球に対する当時の人々の見方の一端を示すものであった。野球に対する人々の批判は誤解に基づいていた。それとともに、野球はただ楽しむ分には一向に構

わないが、ひとたび本腰を入れて取り組むと人格を堕落させる競技であるという理解が、多くの人たちに持たれていたのである。

また、「野球と其害毒」で注目すべきは、「野球のために人生の道を誤った選手の一人」として先述の河野安通志が取り上げられたことである。九月五日の記事の中で、河野は「日本の野球界には私達が贔屓目に見ても沢山の弊風がある」、「私も早稲田なぞへ入らず高等商業へでも入ったらば、と時々思わぬでもない」、あるいは、野球選手たちの間に華美な服装が流行しているのも「渡米から帰った時浅い考えから妙な服装をして其風が日本全国へ伝播するに至った」など、学生野球の堕落と野球の弊害を全面的に認めている(5)。

早稲田大学在学中は米国遠征で活躍して「アイアン・コーノ」と称賛されるとともに、早稲田大学だけでなく学生野球界の著名選手でもあった河野の悔恨の情を載せた記事は、各方面に大きな反響を呼び起こす。そして、九月十日、「野球と其害毒」第十三回に「野球に対する余の意見」として、河野の署名論文が掲載される(6)。

「野球商売人」の問題を取り上げ、その可否を読者に問いかける河野が示したのは、学問と職業を直結させる一種の実学主義的観点を斥けるとともに、職業間の貴賤を否定する態度であった。当時からすでに堅実な職業の代表とされていた銀行員を例として職業には貴賤なしと説く河野の議論は、学校を卒業した学生が学問ではなく特技を活かすことも選択肢としてありうるとし、野球に熟達する者が「野球商売人」になることも可能だとする点に特徴がある。

大正末期から昭和初期における職業概念の拡張

河野の議論はアマチュア野球への対抗を意味するのではなく、むしろ職能集団としての職業野球の発足を目指すものであった。そして、こうした考えの背景には、当時の日本の社会における職業概念の拡張があったと言えるだろう。

明治時代に誕生した事務職や専門職に従事する給与生活者は、社会構造や産業構造の変化を受ける形で、特に大都市において漸次その数を増加させた。そして、大正時代になると第一次世界大戦を契機とする日本の資本主義経済の発展により、中流生活者がひとつの社会層を形成するに至る。この層の中核をなしたのが「サラリーマン」であり、その呼称は大正時代になって登場し、大正末から昭和初期に一般に定着することとなる。

その遠因のひとつが、中等教育の普及である。一八九三(明治二十六)年ごろから一八九九(明治三十二)年にかけて、中学校のほか、高等女学校、実業学校および実業補習学校など各種の中等ならびに準中等教育の学校が整備された。これは、日清戦争から日露戦争へと至る期間に相当し、日本の経済が発展期を迎えた時期でもあった。手織りが機械紡績に変わり、家内手工業が工場制生産に変わるなど、明

治初期に播かれた近代産業の種が、萌芽し始めたこの時期に、それまでの徒弟制度の教育機能を新しい実業教育が受けもつようになり、社会・経済の要請が公教育制度に組み入れられるようになり始めたのである。

サラリーマンの誕生は、一方においては明治初期以来進められた、こうした近代教育の一つの帰結であり、もう一方では全く新しい社会階層の形成を意味した。そして、サラリーマンが日本社会の主要な担い手となることで、「キネマ、カフェ、ビヤホール、ダンスホール、ビリヤード、バー、レビューといったモダンな雰囲気を手軽に楽しむことのできる場所」で心の憂さを晴らし、「一週間のうち六日働き、休日をレジャーやショッピングにあてて消費生活を楽しむという現代生活の原型」を作り上げた「サラリーマン文化の時代の到来」が告げられたのである(7)。

サラリーマン文化の時代とは、「失われゆくものを悲しむより新に生まれてくるものを楽しむ」(8)時代であり、同時に、さまざまな新しい職業が誕生し、普及した時代でもあった。バスガール、エレベーターガール、デパートガール、カフェの女給、タイピスト、看護婦といった職業に就く女性が増加し、女性の社会進出が実現したのは、新しい職業の誕生と普及の好例である(9)。こうした社会の情勢は、行為の対価として報酬を手にすることのできる対象の多様化をもたらした。すなわち、多様な職種が新たに登場することで、既存の職業の枠組みが拡張されたのである。

新たな職業としての野球選手の誕生

こうした動きは、野球によって生計を立てる職業野球選手の誕生を可能にする素地を形成した。だが、日本運動協会は選手の募集に際し、「中等学校卒業以上」という条件を課したものの、応募者に大学卒業の学歴をもつものはおらず、高等学校はおろか中学校も卒業しないものさえいた。当時の世の大部分の人たちにとって、野球をすることで生計を立てるというのは、依然として正業とはみなされていなかったことを示唆する。

第三の支柱
コミュニティ再生の経済学
ラジャン　市場、国家を超え、コミュニティへ。三本柱の均衡と包摂的ローカリズムへの道筋を提示する。月谷真紀訳 ¥3960

資本主義だけ残った
世界を制するシステムの未来
ミラノヴィッチ　米国のリベラル能力資本主義 対 中国の政治的資本主義。両者の病弊は克服できるのか。西川美樹訳 ¥3960

時間と権力
三十年戦争から第三帝国まで
クラーク　権力は歴史性をいかにして作り上げるのか。大選帝侯からヒトラーまで、その謎を解明。小原・齋藤・前川訳 ¥4400

エルサレム〈以前〉のアイヒマン
大量殺戮者の平穏な生活
シュタングネト　アイヒマン＝「悪の凡庸さ」は本当か？ 本人の手記を体系的に使い、人物・歴史像を刷新。香月恵里訳 ¥6820

鳥類のデザイン
骨格・筋肉が語る生態と進化
グラウ　200点超の精緻なイラストで進化の機能美と多様性を描く。鳥類ファン垂涎の書。川上和人監訳 鍛原多惠子訳 ¥6930

マクルーハン発言集
メディア論の想像力
メディアこそメッセージ！インターネット後の未来を洞察したメディア論の先駆者の講演・対談など20篇。宮澤淳一訳 ¥5060

ネット企業はなぜ免責されるのか
言論の自由と通信品位法230条
コセフ　暴力か救済か。インターネットを誹謗中傷の空間に変えた法律の起草から解釈の変遷まで。小田嶋訳 長島監修 ¥5720

東京文京本郷2丁目20-7　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税込）
www.msz.co.jp

これは、サラリーマンが自らを「腰弁当」あるいは「腰弁」と卑下したのと同様に、新しい職種に対する社会の冷淡な態度を窺わせる。その意味で、職業野球選手は、蔑みの対象となるほどに新しく、また、得体のしれない仕事であったといえる。

このような背景もあったため、一九二一（大正十）年七月十八日に日本運動協会が選手を公募した際、選手募集の条件は、練習生の給与は住居と食事が付いて一ヵ月十五円、選手の給与は同じく四十五円とされている。大正十年当時、高等文官の初任給は七十円、東京商科大学を卒業して三井物産に入社した学生の初任給が五十円であったから[10]、中等学校卒業以上とされた協会選手の給与は他の職種に比べて劣るものではなかった。また、汽車で移動の際に選手を三等客室ではなく二等客室に乗せており、日本運動協会の選手への処遇は相当に厚いものであったといえる。これは、一面では、東田も指摘するように、ひとえに野球の専門家を名乗るにふさわしい人間を形成するためであった[11]。同時に、橋戸ら日本運動協会の首脳が、世間に対する体面を考慮した結果でもあった。

大学を卒業した会社員の初任給に比べ見劣りする給与を支払えば、一定程度の教育を受けた人材は集まらず、それだけの金額でも満足できる生活に困窮するものばかりが集まる。また、三等列車を使用すれば、周囲から「職業野球は安価な列車しか使えない」と風評を流されかねない。河野、橋戸、押川ら協会首脳は、選手への待遇を厚くすることで、「職業野球選手」あるいは「日本運動協会の選手」であることが社会的な負い目とならないよう配慮したといえよう。

そのような配慮を必要とするほどに、この当時の職業野球に対する一般の態度は冷淡なものであった。しかし、社会における職業と職種に対する概念の多様化が、少なくとも「職業としての野球」としての職業野球の成立の素地を提供したと考えることができるのである。

何故外来スポーツの中で野球が最も定着したのか

ところで、われわれは様々なスポーツが外国から日本にもたらされた中で、野球がいち早く普及し、定着したことをしばしば当然のことと考える。

しかし、サッカーは一八七三（明治六）年にもたらされ、テニス（一八七八［明治十一］年）、ラグビー（一八九九［明治三十二］年）、ゴルフ（一九〇一［明治三十四］年）、バレーボール及びバスケットボール（一九〇八［明治四十一］年）、スキー（一九一一［明治四十四］年）と、各種のスポーツが諸外国から紹介されている。そのような状況の中で、どうして野球は高い人気を獲得できたのだろうか。

様々な意見がある中で、米国人教師がお雇い外国人として招かれ、こうした人たちが米国で普及していた野球を学生に教えたことが大きく影響したという見解もある[12]。

だが、実際には米国人教師が英国や他国の教師に比べて多いという事実は認められず、外国人教師の数の多さが日本における「近代スポーツ」の導入と普及に影響を与えるなら、日本では野球ではなく英国人がもたらしたサッカー、ラグビー、クリケットなどがより早く普及していたことになる（**表1**）。

従って、外国人教師は「近代スポーツ」の導入の契機ではあったかも知れないものの、普及のために不可欠な存在ではなかった。そこで、開拓使仮学校（後の北海道大学）の事例を手掛かりに、野球が普及した理由を検討してみよう。

一八七三年頃、東京に置かれた開拓使仮学校に米国人の英語教師アルバート・ベーツ（一八五四―一八七五）が着任する。ベーツは学生たちに野球を教えるものの、日本人の学生たちは規則や技術の要点を理解できなかった。しかしながら、開拓使が米国に留学させていた開拓使仮学校の学生が帰国して指導に当たったことで、学生たちの野球の技術も徐々に上達するようになる。やがて、ベーツが持参した三個のボールのうち二個が破損したため、代用品のボールを日本の靴工場で作らせたが、仕上がり具合は不十分であったので、実際に野球の試合をするには苦心した。やがてベーツが注文した野球道具が米国から届き、学生たちの士気も高まったものの、ベーツが急逝したことで学生たちの野球への関心も薄れ、開拓使仮学校では野球は定着しなかった[13]。

このような開拓使仮学校の事例からは、外来のスポーツが定着するために必要な条件の一端が分かる。すなわち、外国人から新たなスポーツを紹介されるだけではなく、指導する日本人、特に指導を受けるものに近しい存在がいること、さらに十分な道具の用意が重要となる。

開拓使仮学校の場合、熱心な外国人教師だけでなく、米国で野球に接した学生が帰国したことで他の学生の野球へ

表1　文部省における国別のお雇い外国人の人数の推移
（1872［明治5］年から1885［明治18］年）

	1872（明治5）	1874（明治7）	1879（明治12）	1885（明治18）
アメリカ	6	14	14	2
イギリス	5	25	7	11
フランス	4	10	5	2
ドイツ	8	24	12	9
その他	1	4	5	2
合　計	24	77	43	26

梅溪昇『お雇い外国人』、講談社、2007年、225–29ページより作成。

の興味が高まったことは、指導する者と指導を受ける者の関係の持つ意味が何であったかを示している。

また、日本で作らせた不完全な道具と米国から取り寄せた道具というように、道具の違いもスポーツへの関心の度合いを左右する。何より、継続して普及に取り組む指導者の存在が不可欠であることは、ベーツの死後に開拓使仮学校の学生が野球への関心を低下させたことからも明らかであろう。

こうした点を他のスポーツの場合と比べると、野球では米国に留学した日本人学生が帰国後に指導に従事する一方、英国の留学生が帰国後にサッカーやラグビーなどを伝授したという事例は乏しい。

あるいは、野球の場合はホーレス・ウィルソンのほか、セオドア・モンロー・マクネア（一八五八―一九一五）、ジェームス・ブラックレッジ（生没不詳）などの米国人教師が継続して指導するものの、英国人教師はサッカーやラグビーをもたらす一方で継続した指導は行っていない。さらに、野球のボールは糸まき式のため、品質を問わなければ製造は比較的容易であったのに比べ、サッカーボールのように丈夫な空気入りボールは国産化が困難であった。

一八八一（明治十四）年の第二回内国勧業博覧会に大学や師範学校、伝習所など文部省所管の教育機関が陳列した品を収録した『文部省教育品陳列場出品目録』には、野球用具一組としてボール四個とバット二本が挙げられ、価格が一円四十銭であったのに対し、サッカーの場合はゴム製のボールが一個八円であった[14]。用具の製造場所が、両者の価格の差として現れたのである。一八七七（明治十）年当時の一円は現在の貨幣価値で二千九百円から七千五百円と推定されるから、約四千円から一万円で二人分のボールとバットを揃えられる野球とボール一個に約二万三千円から六万円を要するサッカーでは、経済的な負担に差が表れることは明らかだ。

スポーツに限らず、新しい事柄に取り組む際、不可欠な用具にかかる金額がかさむことは普及の妨げになりかねない。野球と他のスポーツの定着の過程を考える場合に、用具の費用の多寡、すなわち用具の国産化が実現しているか否かは見逃せない点と言えるだろう。

スポーツを行う場所としての東京の役割

最後に、多くのスポーツが東京から出発して全国各地に伝播した理由を考えよう。

江戸からの改称を経て一八六九（明治二）年に政府機能が京都から移転したことで、東京は新たな首都としての第一歩を踏み出した。これにともない、武家屋敷などの接収と皇族、華族、政府高官、財閥関係者などへの払下げが行われる。その結果、官庁や大学、専門学校、高等学校、中学校などによる旧武家屋敷の利用も進められるなど、都市の構造的な変化が生じることになる[15]。

こうして、新たな首都・東京には人材と技術が集積するとともに、欧米を経由して最新の文物がもたらされる。特にスポーツについては、東京の教育機関で学んだ学生が主たる担い手となり、最初は野球を中心に発展し、次第に他のスポーツも盛んになる。

野球における新橋（新橋アスレチック倶楽部運動場）、品川（日本運動協会芝浦球場）、サッカーの大塚（東京高等師範学校運動場）、ラグビーの麻布（慶應義塾大学仙台ヶ原練習場）など、それぞれのスポーツにとって競技を行うための拠点は、明治時代に入って東京で起きた都市の構造的な変化によってもたらされたものであった。

もちろん、他の地域においても同様に競技の場は確保されたものの、都市の役割の抜本的な変化や人材の集積などが同時に起きるには至らなかった。その意味で、必然的な要素と偶然的な要因が重なることで、東京が日本における外来スポーツの普及と発展の中心地となり、多くのスポーツが東京から全国各地へと広まることになったのである。

おわりに

現在、様々なスポーツが広い人気を博し、「スポーツと言えば野球」という時代は過去のものとなった。また、大学野球の人気がプロ野球に比肩することも、優秀な人材が東京にのみ集まることもなくなった。さらに、二〇一九（平成三十一）年三月には大学スポーツ協会が発足し、大学スポーツの組織化と産業化の促進が図られている。

このような推移を眺めれば、野球を含むスポーツを取り巻く環境は絶えず変化し、これからも新たな様相を呈することだろう。

こうした中で、現代の日本においては、中学校や高等学校の部活動では指導者の指示に忠実であることを要求され、いわゆるプロスポーツではスポーツが生活の手段の一部となっている。これに対し、大学スポーツは一人ひとりの競技者の主体的な取り組みとともに人格の形成と陶冶の面にも寄与することが期待される。

新刊案内

鈴木宣雄 著
解放の学としての資本論
―価値形態論の解読
菊判・二〇〇頁・定価四四〇〇円
マルクスは死んだのか。マルクスの問いかけたものはなんであったか。今、それは意味を失ったのか。否である。労働者階級の解放によってのみ人間の解放に到達する、これがマルクスの確信であった。そのための学問的営為の結晶、それが「解放の学としての資本論」である。労働者階級がなんら解放されていない現代において『資本論』の意義はますます大きい。

木村健二 著
近代日本の移民と国家・地域社会
菊判・四四〇頁・定価八八〇〇円
日本近代史の中で、「出移民」の属性・背景・目的・経緯や政策、それを推進した地域社会や団体組織、出て行った人びとの本国・郷里との関係を、出稼ぎ型、旧中間層再生・飛躍型、「企業家」志向型というタイプに区分して検討。〈越境〉する人びとの社会経済史。

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751

もちろん、大学スポーツには、学問と競技の両立や各団体ないし競技者の活動と大学当局の関係、さらに収益性の問題など、解決すべき課題は多い。しかし、これまでも人々はそれぞれの時代の需要に応じてスポーツのあり方を変容させてきたのであり、時にスポーツの概念は拡張し、あるいは新たな競技が生まれてきた。

それだけに、今後、スポーツのあり方がどのように変貌するか、われわれの興味は尽きないし、大学スポーツは今後も日本のスポーツ界の中で重要な役割を果たすことになる。そして、日本において長く親しまれてきた学生野球は、これからもスポーツの発展の一翼を担い続けるのである。

注

(1)ホーレス・ウィルソンが日本への野球の伝来に果たした役割については、次の書籍を参照せよ。佐山和夫『明治五年のプレーボール』(日本放送出版協会、二〇〇二年)。

(2)小林一三は、一九一五年一月に大阪府豊中村で早稲田大学野球部が冬季練習を行った際、捕手として在籍していた市岡忠男らに対して、「日本も野球が盛んになってきたのでプロを起こしてみたい」と自らの構想を述べた。参照、佐野眞一『巨怪伝』上巻、文藝春秋、二〇〇〇年、三〇六頁。

(3)小林一三「職業野球団打診」『私の行き方』、阪急電鉄、一九九〇年、一二九—一三二頁。

(4)神田順治『九二年版野球殿堂物語』、ベースボール・マガジン社、一九九二年、五八頁。

(5)「旧選手の懺悔」『東京朝日新聞』、一九一一年九月五日、六面。

(6)「野球に対する余の意見」『朝日新聞』、一九一一年九月十日、六面。

(7)伊藤俊治「日本の一九二〇年代」、平井正、保坂一夫ほか編『都市大衆文化の成立』、有斐閣、一九八三年、一八三頁。

(8)同、二〇二頁。

(9)近藤智子「『デパートガール』の登場」『経営史学』第四〇巻第三号、経営史学会、二〇〇五年、二七—四三頁。

(10)石上英一ほか編『岩波日本史辞典』、岩波書店、一九九九年、一七六五頁。

(11)東田一朔『プロ野球誕生前夜』、東海大学出版会、一九八九年、八頁。

(12)後藤健生「明治時代にスポーツを広めた「欧米人」の功績」『東洋経済オンライン』、二〇一九年七月三日公開、https://toyokeizai.net/articles/-/289507?page=3(二〇二一年六月一日閲覧)

(13)池井優『白球太平洋を渡る』、中央公論社、一九七六年、六—七頁。

(14)文部省『文部省教育品陳列場出品目録』、文部省、一八八一年、一四頁。

(15)江戸から東京への変化に伴う都市のあり方の変遷については、次の書籍を参照せよ。陣内秀信『東京の空間人類学』(筑摩書房、一九八五年)、藤森照信『明治の東京計画』(岩波書店、二〇〇四年)、陣内秀信『水都　東京』(筑摩書房、二〇二〇年)。

特集＊大学とスポーツ

箱根駅伝が生み出す付加価値と課題

小野圭久（順天堂大学スポーツ健康科学部協力研究員）

スポーツの力

新型コロナウィルスが感染拡大する中で、東京オリンピック・パラリンピックを開催する意義について、菅義偉首相は、「オリンピックはまさに平和の祭典だ。一流アスリートが東京に集まり、スポーツの力を世界に発信していく」と述べた。さらに首相は、「（アスリートは）障がい者も健常者も様々な壁を乗り越える努力をしている。そうした努力をしっかりと世界に向けて発信をしていく」と続け、コロナ禍において、アスリートが自ら目標を定め、工夫し、努力を重ねてきた「スポーツの力」を世界に発信していくことを強調した。一方で、政府の新型コロナウィルス感染症対策分科会の尾身茂会長が、「このパンデミックで、普通は（開催は）ない」と発言し、東京オリンピック・パラリンピックの中止、延期を求める声も高まっているが、「スポーツの力」そのものは否定すべきではないだろう。また、スポーツ庁は、『乗り越える～「スポーツの力」をすべての子供たちへ～』と題してスポーツに関わる人々のメッセージを発信している。こうしたメッセージを全国の子供たちに伝えていくことは、子供たちがスポーツの価値について自ら考え、議論し、実際にスポーツに取り組んでいく上で意義深い取り組みであり、スポーツの意義、国際・異文化、共生社会への理解を深めるなど、多面的な教育的価値を持つものである。

このように、現代社会におけるスポーツは、政治的、文化的に、人々の生き方や暮らし方に極めて大きな社会的影響力を持つようになった。ただし、その影響力は、人々のスポーツに対する信頼と期待を益々大きくすると同時に、スポーツに関わる人々がその信頼と期待に背いたとき、計り知れないほどの落胆を与えることになることも認識して

おかなければならない。

スポーツとライフスキル

昔から「スポーツは筋書きのないドラマ」といわれる。そのためか、メディアでは、「大舞台」、「立役者」、「独壇場」、「劇的」といった言葉が頻繁に使われ、「名勝負を演じた」などとも表現される。実力伯仲の接戦も見応えがあるが、「逆転」や「番狂わせ」などの奇跡的な歓喜や悲劇は人々に感動を与え、アスリートの最後まで諦めない粘り強さやひたむきさは、人々を前向きな気持ちにさせる力がある。このようなアスリートの取り組みは、スポーツのみならず、学業やビジネスなど、人生の様々な場面で共通する成功要因であり、アスリートの行動から学ぶべき点は多い。つまり、「スポーツの力」は人間の成長に大きな影響を与えるものであり、アスリートをはじめ、スポーツに関わる人々の社会性を高めることで、スポーツはライフスキル教育となり得る力を持っている。

ライフスキルとは、日常で発生する様々な問題やトラブルに対して、うまく対処し、よりよく生きていくために必要な個人の力である。スポーツがライフスキル教育となるためには、スポーツに関わる人々の「心（集中力・粘り強さ・感謝の気持ち・協調性など）」、「頭脳（最新の知識や理論の学び）」、「身体（学んだ最新の知識や理論をトレーニングに活かす）」を高水準でバランスよく育む努力が必要である。つまり、スポーツが人間の「心」、「頭脳」、「身体」が高水準に統合された行動であるならば、スポーツを教えるということは、ライフスキル教育そのものであるべきだといっても過言ではない。とりわけ、生徒や学生たちを対象とするのであれば尚更であろう。

しかし、これまでのスポーツにおける研究は、勝つこと（パフォーマンス）に直結しやすいスポーツ科学のアプローチが主流であり、実際の指導現場においては、アスリートの人間的な成長について十分にケアされているケースは多くはない。スポーツに関わる人々の社会性を高めるためには、スポーツさえできていれば、勉強ができなくても、常識がなくても良いという「スポーツ至上主義」や「勝利至上主義」が、ライフスキル教育において有効な役割を果たす妨げになるということを改めて認識しておく必要がある。

スポーツがライフスキル教育としての役割を果たしてこそ、「スポーツの力」は育まれ、発信されるのである。

大学スポーツと箱根駅伝

一九九〇年代中頃、一八歳人口の急激な減少期を迎え、二〇〇〇年代中頃を過ぎると、大学の入学生定員が受験人口を上回ることになり、「大学全入時代」が到来した。このような一八歳人口の減少に伴い、大学がブランド化戦略の手段として運動部活動の競技力強化に予算をつけ、指導者を招聘するケースが増えてきている。

そのひとつとして、東京箱根間往復大学駅伝競走（以下、箱根駅伝と略す）があげられる。箱根駅伝は関東学生陸上競技連盟が主催する地方大会でありながら、一九八七年に日本テレビが全国放送で全区間の生中継を開始して以降、全国的に知名度、注目度が格段に向上した。合計一〇時間を越える長丁場のスポーツ中継であるにもかかわらず、「山登り」や「山下り」の特徴的な区間や往路・復路の二日間で争われる過酷なレースが生み出す「筋書きのないドラマ」は観る人を魅了し、毎年のテレビ平均視聴率二五％以上を記録している。

箱根駅伝は、一九一二年のストックホルムオリンピックに出場した日本人オリンピック選手第一号（マラソン）の金栗四三が、「世界に通じるマラソン選手を育成する」ために発案したものである。第一回大会は一九二〇年二月一四日に開催され、第三二回大会（一九五六年）から現在の一月二・三日の開催となった。今では正月の風物詩として国民に広く認知され、スポーツによる大学のブランディング戦略ともからみ、その予選会は少子化時代の生き残りをかけた参加大学の死闘の場となっている。

このように、国民的スポーツイベントに変貌した箱根駅伝は、それまでの一五大学の出場から、二〇チーム（一九大学＋関東学生連盟選抜チーム：現・関東学生連合チーム）に拡大された第七九回大会（二〇〇三年）以降、箱根駅伝出場を目指して強化を図る大学も次第に増え、第九三回大会予選会においては過去最多の五〇校が出場し、予選会への参加基準は度々引き上げられてきた。

現在の箱根駅伝は、合計二一七・一㎞を一〇区間で競われ、このような競技形態は、出雲全日本大学選抜駅伝競走（一九八九年創設、六区間三五・一㎞以下、出雲駅伝と略す）や全日本大学駅伝対校選手権大会（一九七〇年創設、八区間一〇六・八㎞以下、全日本大学駅伝と略す）と比較しても、その距離の長さや区間数の多さが際立つ。しかしながら箱根駅伝を目指すものであれば誰もがこなせなければならない距離であり、「箱根ディスタンス」と呼ばれている。そのための練習量は毎月七〇〇㎞、鍛錬期の八月には一〇〇〇㎞以上の走行距離にもおよび、それを可能とする生活環境や練習環境などの整備は必要不可欠となる。ほとんどの大学において、選手たちは専用の合宿所での共同生活によって栄養管理され、規則正しい生活の元、学内外に整備された走り込みのためのロードコースや全天候型の専用競技場で、時間や天候の影響を受けることなく計画通りの練習が可能となっている。さらに、脚筋力や心肺機能の強化、故障予防を目的として、走路面が柔らかく起伏に富んだクロスカントリーコースを整備する大学も多くなってきている。

箱根駅伝にみる大学スポーツの課題

箱根駅伝は、大学のブランディング戦略に大きく貢献しているだけでなく、もはや陸上競技の一種目、一競技会で

は済まされない国民的スポーツイベントへと変貌した。箱根駅伝に憧れる高校生ランナーの多くが関東の大学へ進学する一極集中は当然の流れといえよう。そのため、関東の各大学は、年間の最大の目標を箱根駅伝に置く傾向が強く、本来格上であるはずの出雲駅伝や全日本大学駅伝を、単なる箱根駅伝の前哨戦や調整試合といった意味合いで戦い、必ずしもベストメンバーで臨まない大学も少なくない。それでも、出雲駅伝や全日本大学駅伝の上位は関東の大学が独占し、関東の大学への戦力の一極集中による地方大学との実力差は大きい。

しかし、箱根駅伝を目指す学生アスリートが「箱根ディスタンス」へ没入することで、各々に合った距離特性が犠牲となり、一五〇〇mや五〇〇〇mといったトラック種目の記録停滞を招くと指摘されている。また、受験戦争とは無縁のスポーツ推薦による入試制度や、合宿をはじめとする練習時間の優先は、勉学や部員以外の学生と触れ合う時間を奪い取ってしまい、学力低下や視野狭窄も指摘されている。さらに、箱根駅伝出場を目指した多くのアスリート学生は、箱根駅伝を競技生活の最大の目標と位置付けてしまうため、大学で燃え尽きてしまう。このような、大学でのバーンアウトやトラック種目での記録停滞は、日本陸上競技界の低迷をはじめ、実業団チームの存続危機の原因の一つとして指摘されている。

箱根駅伝出場を目指すにあたり、学生アスリートの生活環境や練習環境の整備のみならず、監督や監督をサポートするコーチ、有望な人材を確保するためのスカウト担当の雇用など、大学の総合力が問われる時代となってきた。とりわけ、主たる指導者である監督においては、実業団や高校駅伝で実績のあった指導者を招聘するケースもみられるが、実業団や高校駅伝で培われた経験や勘だけでは箱根駅伝特有の競技形態である「箱根ディスタンス」に即応することは難しい。また、監督の交代において、新監督の指導理念が浸透し、根付くまでには、前任者の影響を受けた選手が卒業と入学を繰り返すことで全て入れ替わらなければならない。就任初年度にスカウトした選手が二年目から入部してくることを考慮すれば、新監督の指導理念が浸透するまでには少なくとも五年の時間を必要とし、そこから本格的なチームづくりが開始されるといっても過言ではない。結果を急ぐあまり、五年を待たずして監督交代を繰り返す大学も少なくないが、短期間で結果が求められる監督の指導は「結果至上主義」へと傾き、指導理念のない「結果至上主義」はチームを混乱、停滞させ、学生アスリートを疲弊させる。卒業と入学を繰り返す変化の激しい大学スポーツがライフスキル教育になるためには、監督にじっくりとチームづくりをする場と時間を与え、長期戦略を発揮できるコーチングスキルを育成することが求められる。

箱根駅伝において時折みられる、ランナーがふらふらになりながら襷をわたす姿は、観ている者にハラハラドキド

キの感情と感動を与えるが、監督や学生アスリートが心身に強度の負担を強いられていることを今一度考えてみる必要があろう。

UNIVASに加盟するメリットとは

箱根駅伝に代表されるような学生アスリートの活躍は間違いなく大学に大きな付加価値を生み出す一方で、指導者や学生アスリートの不祥事や練習中の事故などが起きれば、大学のブランドは傷つき、イメージダウンとなる。そこで、文部科学省とスポーツ庁は、大学スポーツ先進国のアメリカで一九一〇年に設立された全米体育協会（以下、NCAAと略す）の日本版として、一般社団法人大学スポーツ協会（以下、UNIVASと略す）を二〇一九年三月に設立した。

アメリカでは、NCAAという大学横断的かつ競技横断的統括組織が大学スポーツ全体の発展を支えている。一方、これまでの日本の大学スポーツは、大学内の課外活動として位置づけられ、学生を中心とする自主的・自律的な運営が行われ発展してきた経緯から、大学の関与は限定的で、全学的なスポーツ分野の取組を一体的に行う部局を置いていない大学が多い。そのため、個々の運動部がそれぞれ自治の努力を重ねているのが現状である。また同様に、大会を開催する学生競技団体も競技毎に発展し、全国高等学校体育連盟（略称・高体連）や日本中学校体育連盟（略称・中体連）のような、競技横断的な統括組織が大学スポーツのみ存在していない状況が続いてきた。そこで、NCAAを模範とするUNIVASの参加大学は、運動部を一元的にマネジメントするアスレチックデパートメント（体育局）を設置するなど、大学が持つスポーツ資源（学生、指導者、研究者、施設等）の価値を最大化しようと試みている。

二〇二一年二月末現在、UNIVASには二二〇校が加盟しており、二〇二五年までには四〇〇校の加盟を目標としている。全国の大学の約七八〇校中、運動部を強化している約四〇〇校をターゲットとしているようだ。また、UNIVASには大学のみならず、学生競技連盟（以下、

猫が歩いた近現代 化け猫が家族になるまで
真辺将之著　猫って、ずっと可愛がられていた訳じゃなかったんだ……。あなたの知らない「ちょっと昔の猫」の話。【2刷】2090円

室町・戦国時代の法の世界 日本史史料研究会監修 松園潤一朗編
法の多様な内容や史料のあり方、研究史、争点などを平易に紹介。さまざまな階層の権力に制定・運用された法の形式や内容を解説する。2420円

古代の食を再現する みえてきた食事と生活習慣病
三舟隆之・馬場基編　「正倉院文書」「延喜式」から土器や動物の骨、木簡まで総動員。そこから意外な病気との関係も明らかに。【2刷】3520円

角田文衛の古代学 ③ヨーロッパ古代史の再構成 公益財団法人古代学協会編 5500円
中世の禅宗と日元交流 康昊著 8800円
地図で考える中世 交通と社会 榎原雅治著 5280円
近世後期の世界認識と鎖国 岩﨑奈緒子著 1045円
幕末の学問・思想と政治運動 気吹舎の学事と周旋 天野真志著 9900円
皇室制度史料 儀制　大嘗祭一 宮内庁書陵部編纂 12650円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税込

学連と略す）や各競技団体までが同じ正会員として加盟しているが、大学と学連や各競技団体では、そもそも学生スポーツに対する目的や位置づけは異なる。大学は、学生アスリートの人間としての総合的な成長を一番に考えなければいけないのに対し、学連や各競技団体は、大会や試合の主催者として競技の日程を優先させ、競技力の向上を大きな目標とする。つまり、学連や各競技団体は、学生アスリートの成績や授業の履修状況などまったく考慮せず、選抜して代表合宿に参加させ、海外遠征にも連れて行く。本人も普通は喜んでそれを受け入れ、周りのチームメートはそれをうらやみ、一般の学生たちは「なんのために大学にいるのか」と感じる。これでは学生アスリートを自分たちの仲間として応援する気など起きないだろう。しかし、ＵＮＩＶＡＳの組織運営からは、未だそれぞれの役割分担は明確に示されておらず、アスレチックデパートメントを設置しても加盟を見送り、独自の取り組みを展開しながら、加盟するメリットの有無を見極めている有力校も少なくない。

指導者によるハラスメントや学生アスリートの不祥事が大きな社会問題となっている近年、ＵＮＩＶＡＳの理念や目的に賛同し、大学側が運動部を経営資源と考え、リスクを管理してその価値を最大化しようとするのは当然の流れといえるが、一八歳人口の減少に伴い、「大学全入時代」が到来している現在、多くの大学は新たに投資できるほどの財政的な余裕がない。しかし、変化の激しい大学スポーツにおいて、競合他校との競争に打ち勝ち、継続的に成果を残していくためには、正課活動と同様の組織マネジメントが必要不可欠である。つまり、学業との両立にむけた学修環境の整備やデュアルキャリアへの対応、学生アスリートの生活環境や練習環境の整備、指導者の育成や指導環境の整備、潤沢な活動予算の捻出などの環境が整備されなければ、競技力の向上が見込めないばかりか、指導者や学生アスリートの満足感は得られず、不祥事や練習中の事故を引き起こす温床にもなりかねない。定員充足にむけた学生募集において運動部が大きな役割を果たすとはいえ、〝釣った魚に餌やらぬ〟対応では、大学スポーツはライフスキル教育にもブランディング戦略にもなり得ない。

箱根駅伝出場に向けて取り組む各大学においても、箱根駅伝が生み出す付加価値を最大化させるためには、大学が持つスポーツ資源（学生、指導者、研究者、施設等）を認め、スポーツ庁が推進するＵＮＩＶＡＳの流れを背景に、スポーツ分野を一体的に統括するアスレチックデパートメントの設置や大学のスポーツ戦略を担うスポーツアドミニストレーターの育成や配置など、運動部を自らの責任でマネジメントしようとする大学側の動きが求められる。

特集＊大学とスポーツ

大学でスポーツの包摂性を考える

鈴木直文（一橋大学大学院社会学研究科教授）

スポーツの場としての大学

学生時代、私にとって大学とは「スポーツをするところ」でした。体育会のラクロス部に所属し、「日本一」という目標に向かって日々汗を流していました。そんな私が、いまは大学でスポーツを（あるいはスポーツについて）教える人になっています。二〇一〇年に一橋大学に着任して以来、スポーツ社会学の講義を行う傍ら、スポーツ実技の授業も毎年担当してきました。

この間、私自身のスポーツに対する理解やスタンスは大きく変化しました。まずラクロスは私のライフワークとなり、大学卒業後も社会人クラブチームで日本一になったり、大学チームのコーチをしたり、博士課程で留学中にはスコットランド代表として世界大会に出場したり、いまでは日本ラクロス協会の強化部で日本のラクロス全体のレベルアップのための活動をしたり、と、ますます「高みを目指す」ようになっています。

一方、大学の教育のなかでスポーツを扱うときは、競争的な側面をむしろ強調しないようになりました。スポーツ社会学の講義では、博士論文以来取り組んでいる「スポーツを通じた社会的包摂」というテーマで話をします。スポーツの「包摂性」には、スポーツ自体を包摂的にすることと、スポーツが社会全体を包摂的にすることの、二つの側面があります。究極的には後者の方が断然大事なわけですが、実はスポーツは前者の段階で大きくつまづいているのだということが、わかってきました。

そのことに気づかせてくれたのが、実技の授業でした。着任当初、スポーツ実技は全学必修でした（現在は社会学部のみ必修）。すると、いわゆる「体育嫌い」「スポーツ嫌い」の受講者も、単位を取るために「仕方なく」授業にきます。

驚いたのは、その数の多さでした。体育の授業で植え付けられた運動に対する苦手意識が、そのままスポーツへの忌避感に繋がってしまっているのです。

そこで私の授業のテーマは、「そこに集まった誰もが楽しく参加できるスポーツ」というものになりました。身体能力の優劣による「格付け」によって多くの「スポーツ弱者」が生まれている。これでは「競争原理による排除」そのものです。そうではなく、誰もがその人なりの楽しさを見出せるスポーツの場づくりができるのではないか。まさに「スポーツを包摂的にすること」に、真正面から取り組むことになったのです。

「オルタナティブスポーツ」と名付けたこの授業では、参加の敷居を下げた普及型のスポーツ（ソフトラクロス、タグラグビーなど）と身体的障害がハンディキャップにならないように工夫されたスポーツ（ブラインドサッカー、ふうせんバレーボールなど）を順番に体験します。そして、そのスポーツの包摂性の秘訣がどこにあるのかを考え、最終的に「みんなが楽しめる」オリジナルのスポーツを開発することを目指します。

授業のなかで学生たちが最大化しようとする変数は、「全員が楽しんでいるかどうか」です。自分だけが楽しいのはもちろんダメだし、他の人を楽しませるために自分が楽しくなくなるのもNGです。何らかの属性によって特別扱いをすること（女子は得点二倍など）も、推奨しません。その条件で、学生たちはチームの作戦や雰囲気づくりを工夫したり、ゲーム自体のルールを話し合って変更したり、を繰り返します。

すると、様々な気づきが生まれていきます。他人との比較ではなく自分自身のできることが増えていく内的プロセスが楽しさの源泉であること。それでも仲間の励ましや優しい声かけが安心感を生むこと。ルール次第で活躍できる人がしばしば大きく変わる（つまり「能力」は絶対的なものではない）こと。出番はなるべく平等な方がいいけれど、それにはその種類が多様であった方がよいこと。などなど。こうした気づきは、翻って社会全体の包摂性を考えることにも繋がります。

さて、こうして、自身の実践としては競争的なスポーツの面白さを追求し続けながら、教育の場ではスポーツの包摂性を突き詰める、という一見矛盾することをこの一〇年し続けてきたことになります。自分でも不思議だったのですが、最近になってやっと、この二つが実はとてもよく整合しているのだ、ということがわかってきました。以下では、このことについて少し掘り下げてみます。

スポーツを遊びに戻す

矛盾を解く鍵は、「スポーツを遊びに戻す」ということにあります。ともすれば競争性ばかりが強調され排除的な振る舞いを示すことが多いですが、スポーツという遊びは

本来、競争的であるか包摂的であるかの二者択一ではなく、その双方の楽しさや喜びが両立していることに本質があると思うのです。どういうことかを説明する前提として、まずは「遊び」とはどういう特質を持つものなのかについて考えてみたいと思います。

「遊び」の英語訳は、“play”です。“To play”という英語の動詞を和訳するとき、「遊ぶ」（“I play with him.”）「する」（“I play baseball.”）「演じる」（“She plays the role.”）「奏でる」（“He plays the piano.”）といった表現を当てることができます。なかなか多彩です。こうみてみると、とてもアーティスティックな言葉でもあるようです。

次に「遊」という漢字を含む二字熟語を、思い浮かべてみましょう。「浮遊」「外遊」「遊撃」「遊説」「遊学」……こうして並べてみると、フワフワ、フラフラした感じがします。「自由」とか、「余裕」とか、「溜め」のようなもの。それが「遊」の意味のようです。西村清和の『遊びの現象学』（勁草書房、一九八九年）でも「遊隙」と「遊動」という言葉で、「どっちつかず」の状態こそが遊びの特質だと説かれています。

どっちつかずといえば、「ハンドルの遊び」（英語でも“play in the steering wheel”というのだそうです）も同様です。それは「まだ方向づけられていない」ことであり、したがって「どっちの方向にも行ける」ということでもあります。一旦左に切ろうとしたハンドルを、タイヤが左に向く前に右に切り直すことも出来ます。一々過敏にタイヤの方向が変わってしまったら、制御に忙しくて仕方がありません。ゆったりとした気分でまっすぐ進めるのも、ハンドルに遊びがあってくれるからです。

原泰久による中国の春秋戦国時代を描いた漫画『キングダム』（『週刊ヤングジャンプ』集英社、二〇〇六年～連載中）では主人公の信が率いる部隊「飛信隊」が、いつも遊撃隊として戦場に投入されます。彼らの戦場での役割は予め定まっていないのです。しかし戦況が動き出すと、敵に致命的な一撃を浴びせる役割を与えられ、一気に敵陣深くに攻め入ることになります。彼らは役割の方向性を与えられていないのですが、だからこそその力をいつでも最も効果的な目的に振り向けることができるわけです。一見無目的であることが、最も目的にかなう用途への準備になっているのです。

つまり遊びとは、「次への準備」であるともいえそうです。武術で「居着かない」状態と言われるものも、一つのことに固執せずに「遊んで」いることで、全体を鳥瞰的に眺めることが可能になり、常に適切な一手を選ぶことができる状態だと言えるかもしれません。「遊び」は、フラフラしている状態に止まるわけではないのです。棋士の羽生善治も『直感力』（ＰＨＰ新書、二〇一二年）のなかで、一見無駄にみえるフラフラとした時間が、勝負所での集中を生むのだと言っています。

考えてみれば、遊びが昂じると「一つのことにのめり込む」ということがしばしば起きます。フラフラと目的が定まらないフェーズから、没入状態へと突っ込んでいく。これをM・チクセントミハイは「フロー」と呼びました（『フロー体験』今村浩明訳、世界思想社、一九九六年）。フローな時、人はその活動に自己目的的に没頭しています。楽しさの感覚と強く結びついているだけでなく、最高のパフォーマンスが発揮されている状態でもあります。しかしその準備段階として、フラフラと定まらない時間が必要なようです。

このことは、同じくチクセントミハイが『クリエイティビティ』（浅川希洋志監訳、世界思想社、二〇一六年）という本で明らかにした創造性の原理とも共通しています。創造的活動には必ず目的が一つに定まらない試行錯誤期間があり（創造的な人はボーッとする時間を取っている）、ある時「アーハー！」とひらめく瞬間を迎えると、一気に生産的な活動へと没入していくと言います。そしてそれが、彼が「生産システム」とよぶ社会的な仕組みと接続する時、創造的な作品が多数生まれることになります。

生産システムとの接続ということを私の言葉で言い換えると、遊びの価値が他者から認められる、ということだと思います。現存する遊びはいずれも、その遊びを面白いと感じる人たちのコミュニティによって維持されています。そのコミュニティの規模がとても大きければ、プロスポーツのように大きなお金が動く産業にもなり得ます。面白さを共有する仲間がいることで、遊びを持続することができるのです。

つまり遊びには、フラフラと目的が定まらないフェーズと、無我夢中にそのもの自体にのめり込むフェーズとがあり、それがある形式で持続的に社会に存在しうるのは共同性のおかげである、ということになります。包摂的で試行錯誤を繰り返すオルタナティブスポーツは「フラフラ」フェーズに属し、競争的で高みを突き詰めるスポーツ（私の場合のラクロス）は「のめり込む」フェーズに属するということができそうです。その両者にとって、共同性が必要不可欠です。

居場所とスポーツ

まず、包摂性と共同性の関係について考えてみましょう。私は研究の一貫でダイバーシティサッカー協会というNPOをやっています（www.diversity-soccer.org）。活動の中心は、ホームレス、ひきこもり、精神障害などをはじめとした様々な社会的困難を抱えた人たちに、サッカーをはじめとしたスポーツを通じて「居場所」をつくることです。

「居場所」というのは、いわゆる若者支援と呼ばれる分野でよく使われる用語です。ダイバーシティサッカー協会のパートナー（ダイバーシティカップなどのイベントに参加する団体）には、若者支援業界の団体が多く、彼らとの連携を通じて「居場所」とはどういう性格のものなのか、そして

そこでスポーツがどういう役割を果たしうるのかが、わかって来ました。

居場所で起きていることは、自分らしさの承認、好きなことにチャレンジする勇気、葛藤を乗り越えることによる相互理解の深化という三要素のサイクルとして理解できます（鈴木直文編『社会（スポーツ）を遊ぶガイドブック』ビッグイシュー基金、二〇一八年、https://bigissue.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/sports_guide_book.pdf）。居場所を訪れる若者は、社会で「主流」とされる価値観に照らして承認を得にくい状態におかれています。そんな若者を「そのままでよい」と受け入れるのが、最初の一歩です。

「そのままでよい」というメッセージは、「自分のしたいことをしてよい」という形式を取ることが多いようです。他人から押し付けられる「するべきこと」ではなく、「したいこと」「好きなこと」をしてよい。もっといえば、したいことがすぐにみつからなければ、何もしなくてもよい。これが「自分らしさの承認」という段階です。無条件にそこにいてよいという安心感。この「無目的性」が、居場所を形作る第一条件です。

ただ、いつまでも「無目的」であることが期待されているわけではありません。この一見無目的な時間は「好きなこと」「したいこと」（つまり自己目的的に取り組めるもの）に出会えるまでの、準備期間です。本当に何をしてもいいのだ、という安心感はやがて「〇〇がしたい」という意思表示をする勇気に繋がっていきます。これが「好きなことにチャレンジする勇気」という段階です。（スポーツは「好きなこと」になりうる選択肢のひとつとして、しばしば用いられます。）

実際、好きなことをするということに一度踏み出してみると、それに付随していろいろな困難や葛藤に出会います。その中には、他者（例えば支援者）の理解を得るという作業も含まれます。他者に自分のしたいことをわかってもらい、それができる状況を一緒に作っていく。その過程で、自分自身も、それを助ける他者も、その人の「らしさ」をよりよく理解できる。この「葛藤を乗り越えることによる相互

藤原書店

いのちの原点「ウマイ」
シベリア狩猟民文化の生命観
荻原眞子　「ウマイ」とは、南シベリア中心にユーラシア諸民族に共通する生命の母神。　2860円

祈り
上皇后・美智子さまと歌人・五島美代子
濱田美枝子・岩田真治　和歌を通して上皇后様の半生と美代子の生涯を描く、初の労作。2970円

草のみずみずしさ
感情と自然の文化史
A・コルバン　“感性の歴史”第一人者による、「草」と「人間」の歴史。
小倉孝誠・綾部麻美訳　2970円

ゾラの芸術社会学講義
マネと印象派の時代
寺田光徳　ブルデュー『芸術の規則』等“芸術社会学”から初めて観た、ゾラ美術批評。　6380円

新型コロナ「正しく恐れる」II
問題の本質は何か
西村秀一　発生から一年余、リスクの「本質」をどう伝え、どう対策するか。　井上亮 編　1980円

新型コロナ「正しく恐れる」
西村秀一　“過剰”“的外れ”な対策を見きわめ、「人間らしい生活」を取り戻すために、ウイルス専門家が提言。　好評3刷　1980円

ワクチン いかに決断するか
1976年米国リスク管理の教訓
R・E・ニュースタット＋H・V・ファインバーグ　政治、行政、メディア、市民必読の名著。西村秀一訳　3960円

月刊 機　B6変32頁　6月号 No.351
西村秀一／荻原眞子／西村秀樹／金時鐘／広井多鶴子／方波見康雄／金城実／宮脇淳子／鎌田慧／中西進／加藤晴久（ほか）
年間購読料 2000円（送料込）　◎見本誌・ブックガイド呈　＊表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL 03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

理解の深化」という段階を経て、「自分らしさの承認」が強化されることになります。

このように居場所で起きていることは、遊びにおいてフラフラした状態がのめり込む状態に移行していくプロセスに非常によく似ています。「したいこと」「好きなこと」がすぐにみつかるわけではないので、辛抱強く待つ姿勢が求められることになります。あだち充の漫画『ショートプログラム2』（小学館、一九九六年）所収の短編「帰り道」に、近所の子どもが集まって遊んでいるとき、ガキ大将が集団から遅れをとった一番幼い子を「待ってやれ」と他の仲間を制止するシーンが描かれています。みんなで遊ぶために、時に「待つ」ということが必要になる。社会や集団が包摂的であるためには、このことの価値が共同的に理解されている必要があります。

成功／失敗の二分コード

次に、スポーツの競争性と共同性の関係をみてみます。スポーツは競争を楽しむ遊びですが、競争を成り立たせているのはルールです。ルールによって勝ち負けの基準が示され、その基準に照らしてひとつひとつのプレーの善し悪し（成功失敗）が規定されます。勝ちに近づくものは「成功」で、負けに近づくものは「失敗」です。競争がうまく成り立つためには、参加する全員がこのルールを理解し、遵守しようとしていなければいけません。共同性が競争性を担保しているわけです。

成功／失敗を規定する無数の二分コードの存在、そしてそれが共同的に維持されているということが、スポーツの楽しさの基盤にもなっています。ひとつには、スポーツ中の行為はその都度、成功か失敗かのフィードバックがかかります。このフィードバックの即時性は、チクセントミハイが発見した人をフローに導く原理のひとつです。成功するか失敗するかが不確定な中で、成功に向けて自己を統制する感覚が人を夢中にしていくのです。

そうした成功と失敗のフィードバックループは、自分ひとりでも感じられます。しかしあるスポーツのリテラシーを高次元で共有している人同士は、表層的な成功と失敗以上に、さらに細分化された世界でプレーの善し悪しを読み取り、お互いを称え合うことができます。こうした「分かってくれる」仲間の存在が、もっと上手くなりたい、という情熱を駆動してくれます。（「居場所」における「自分らしさの承認」とも、パラレルであることが分かります。）

これは、きっとスポーツだけではないでしょう。アートの世界でも、同じことが起こっているに違いありません。いずれも“play”する対象であったことを、思い起こしましょう。アートもスポーツも、それを好きな人が、ただそのことを目的に取り組む自己目的的行為、つまり遊びであり、その楽しさを理解し合う共同体によって支えられているという点で、共通しています。

他者の存在こそがスポーツやアートの楽しさを担保してくれているとすれば、本来は仲間が多いに越したことはないはずです。しかしそうした高次のリテラシーによって支えられているコミュニケーションは、それを共有していない人からみたら「意味不明」で「ついていけない」ものであり、したがって排他的な振る舞いにもなりがちです。「のめり込み」が高度化しすぎると、そのコミュニティーは閉鎖性が増してしまう。

だから、仲間を増やすためには、もう一度「フラフラ」した状態に戻っていく必要がある。成功／失敗のコードを絶対視してしまえば、そのコードは人を排除するように働きます。しかしそれはそもそも「楽しさを共有する人がみんなで作り上げたもの」です。だとすれば、コミュニケーションのコードが共有できていない他者を尊重することこそが、私たちをより高次の楽しさに導いてくれるかもしれない。大学でのスポーツとの出会いが、他者への寛容さが自らの楽しさの源泉なのだという気づきになれば、と願っています。

知泉書館

古典の挑戦
古代ギリシア・ローマ研究ナビ
葛西康徳，V.カッツァート編　国際的に活躍する内外の研究者が西洋古典学の魅力へ初学者を導く　菊/584p/5000円

哲学的人間学
〔知泉学術叢書 15〕
グレトゥイゼン／金子晴勇・菱刈晃夫訳　古代からルネサンス近代に至る人間学の歴史を考察　新書/424p/5400円

中世哲学講義 第一巻
昭和41年－44年度
山田晶（川添信介編）　京大学部生向けの18年に及ぶ中世哲学講義を全五巻に収録。貴重な記録　A5/460p/4000円

宗教改革的認識とは何か
ルター『ローマ書講義』を読む
金子晴勇　信仰義認論を中心とした若きルターの宗教改革的精神の生成過程が見事に結実する　四六/340p/3500円

中東近現代史
若林啓史　歴史的視点と冷静な現実分析で混迷する中東世界の全体像を描き，幅広い層へ提供　新書/828p/5400円

自由主義経済の真実
リュエフとケインズ
権上康男　ケインズの論敵でフランスの理論・政策家リュエフの自由主義経済の意義を考察　四六/292p/3200円

東京都文京区本郷 1-13-2（税別）
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
http://chisen.co.jp

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

第一六期　大学出版部協会・活動報告

三月一九日（金）一五時〇〇分～
　第一〇回　営業部会　開催
三月二五日（木）一五時三〇分～
　第九回　理事会　開催
四月　八日（木）一四時〇〇分～
　第六回　編集部会　開催
四月一六日（金）一五時〇〇分～
　第一一回　営業部会及び総括会議　開催
四月二三日（金）一五時三〇分～
　第一〇回　理事会　開催

第一七期　大学出版部協会・活動報告

五月二八日（金）一三時三〇分～
　第一七期（二〇二一年度）
　定時社員総会　開催
　第一回　理事会　開催
六月一一日（金）一四時〇〇分～
　第一回　編集部会　開催
六月一八日（金）一四時〇〇分～
　第一回　営業部会　開催
六月二五日（金）一五時三〇分～
　第二回　理事会　開催

※すべてZOOMでの開催

北海道大学出版会

▼北海道大学CoSTEP・北海道大学総務企画部広報課・北海道大学生活協同組合編『**北大キャンパスガイド**』（四六判・一三六頁・一九八〇円）「知って楽しく・役立つ」情報からマニアックな話題まで収録した北大キャンパスを楽しむためのガイドブック。

▼佐々木力著『**数学的真理の迷宮―懐疑主義との格闘**』（四六判・二八四頁・四九五〇円）『不思議の国のアリス』の数学観から、古代ギリシャから現代への懐疑主義思想との格闘をたどって、数学的知識の成立根拠を探る。

▼村井章介著『**東アジアのなかの日本文化**』（A5判・三五六頁・四一八〇円）中国・朝鮮、蝦夷地、琉球、境界の島々（竹島や尖閣諸島）を視野に入れ、東アジアの交流を通して日本文化の形成と諸相を論じる。

▼増井真琴著『**転向者・小川未明―「日本児童文学の父」の影**』（A5判・四九四頁・八八〇〇円）大正期童話以外の多岐にわたる作品と実人生を分析。明治・大正・昭和を生き、思想的転向を繰り返した近代文人の横顔を照射する。

弘前大学出版会

▼弘前大学教育学部編『**弘大ブックレット14　人、人と育つ　弘前大学教育学部特別活動授業録**』（A5判・六五頁・五五〇円）教師の「生きた経験」に基づく視点から、集団で生きる意味を照らす。痛烈な失敗例なども交えながら、「生きる」ことに深く触れるユニークな視点と、考えの掘り進め方をまっすぐに示す。自分を見つめる手助けになる書。

▼弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究所編『**白神学入門〈2021〉**』（A4判・一〇四頁・一九八〇円）多様な切り口から白神山地の人や動植物のくらし、自然環境を紹介。学問分野としては気象学、地質学、古生物学、植物学、動物学、考古学、民俗学、地理学など多岐にわたる。白神山地について幅広い知識を得たいという方におすすめ。

▼長瀬智行・吉岡良雄・別宮耕一共著『**暗号技術を支える数学〈第2版〉**』（B5判・二六一頁・二七五〇円）昨年刊行し大好評を博した書籍の改訂版。キャッシュレス時代に不可欠な情報保護や暗号の仕組みを分かりやすく解説。付録にはC言語プログラムをできるだけ多く掲載。

東北大学出版会

▼東北大学大学院文学研究科　講演・出版企画委員会編『**未来への遺産**』（四六判・二一二頁・二四二〇円）「人文社会科学講演シリーズ」の第11巻。考古学・文学・西洋哲学・歴史・語学といった人文学からアプローチする、先人が遺した知の恩恵をめぐる論考集。

▼吉武清實、岡田有司、榊原佐和子編『**共生社会へ　大学における障害学生支援を考える**』（A5判・二三六頁・二四二〇円）「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」の施行後、障害のある学生に対しての現場対応は、どのように変化したのか。大学に求められる「合理的配慮」とは、どのようなものとなったのか。授業、学生生活、支援相談、教職員の意識と理解など、大学における様々な場面について、教員・研究者がそれぞれの領域から問題点を論じる全8章の論考から構成。これからの共生社会づくりへとつながる現状の課題と解決の手がかりを、現場発信の理念と具体的な事例から詳細に提示する、障害学生支援に携わる関係者必携の書。「高等教育ライブラリ」シリーズの第16巻。

流通経済大学出版会

▼杉山雅洋著『**交通学の足跡―角本良平の交通学探索の旅路を辿る―**』（A5判・二九八頁・三六三〇円）角本良平は超人的な研究活動を行い膨大で貴重な研究実績を残した。都市交通研究・通勤新幹線構想、道路公団改革、郵政改革等多岐にわたる主張を整理・紹介し、その偉大な足跡を紐解く。

▼小谷究・三倉茜著『**女性コーチ―それぞれの歩み―**』（A5判・一八〇頁・予価一九四〇円）女性コーチになりたいアスリートが増えることに期待を込めた一冊。

聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『**教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために―**』（B5判・一四〇頁・一七六〇円）幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

▼宇佐美博子・河村久・神田由紀・黒須利夫・小林芳枝・長橋雅俊・松井孝夫・八木正一著『**教職実践演習**』（B5判・一四六頁・一七六〇円）中学校・高等学校教諭を目指す方に向け、教職課程の振り返りから生徒指導要録・通知表の記入の仕方まで解説。教職の魅力が満載。

▼髙橋裕樹著『**新しい時代のキャリアデザイン―自分の人生を自ら描くために―**』（A4判・一六七頁・一七六〇円）全十五章構成で、記入式ワークシートを使いながら、キャリアデザインの基礎から応用まで段階的に理解を深める。「なぜ働くのか」を問いかけつつ、一人ひとりが激動の時代を乗り切り、力強く生きるための人生の羅針盤となる書。

慶應義塾大学出版会

▼松崎久純著『**英語で仕事をしたい人の必修14講**』（A5判・二四〇頁・二六四〇円）二五ヶ国一〇〇都市以上での業務経験を持つグローバル人材育成の専門家が伝授する、実用的な英語習得のためのノウハウ。達成目標や取り組み方、四技能の習得方法、文化的な背景など幅広いテーマを全一四回の講義で伝える。

▼戸谷洋志著『**ハンス・ヨナス　未来への責任―やがて来たる子どもたちのための倫理学**』（四六判・二八八頁・二九七〇円）原発や遺伝子操作など、テクノロジーは遠い未来にまで影響を及ぼす。既存の倫理学では説明できない、「未来世代への責任」を果たすための新たな思想を構築したヨナスの未来倫理学に迫る。

▼横路佳幸著『**同一性と個体―種別概念に基づく統一理論に向けて**』（A5判・四六四頁・六六〇〇円）哲学において最も基本的かつ重要な概念でありつづける「同一性」。形而上学的・意味論的・認識論的観点から「同一性」を分析・整理し、種別概念に基づいた統一理論を提唱する気鋭による野心的試み。

専修大学出版局

▼徐一睿・孫文遠編『**クールダウン・エコノミー**』（A5判・三四八頁・三九六〇円）日本の高度成長から安定成長、そして停滞期への移行の歴史的経験を再確認する日本編、中国の高度成長から中成長期（新常態）への移行の現状分析を行う中国編、そして対外直接投資・産業・特許政策の視点における日中比較編を通して、経済のクールダウンの影響を考察する。

▼凌飛著『**現代日本語の文末形式「（の）ではないか」**』（A5判・一二八頁・二六四〇円）日本語学習者にとって難しい表現であり誤用も生じやすい否定疑問文「（の）ではないか」という形式と、その類似表現「じゃん」について、使用実態を調査し用例を分析、考察する。

▼孟慧著『**日本語の事実条件文―コーパス調査を中心に**』（A5判・二四二頁・二八六〇円）日本語における事実条件文について、複数のコーパスを用い、日本語母語話者による事実条件文の使用傾向、日本語学習者による使用の特徴、習得に与える影響や問題点を日中対照の視点を入れて明らかにする。

玉川大学出版部

▼中井俊樹編著『**大学教育と学生支援（大学SD講座2）**』（A5判・二一六頁・二二〇〇円）大学職員が大学教育と学生支援に関する知識や技能を身につけられるよう、業務に役立つ内容をその背後にある理論や原理と関連付けて紹介する。巻末資料も豊富に掲載。

▼ブルース・マクファーレン著　齋藤芳子・近田政博訳『**知のリーダーシップ―大学教授の役割を再生する**』（A5判・二二二頁・二四二〇円）教授がどのように知のリーダーシップを提供できるかについて、様々な「リーダーシップ」の形を提起しながら世界的に通用するアイディアを紹介。教授の才能を再活用する方法について、現代に新たな考え方を示す。

▼カール・ワイマン著　大森不二雄・杉本和弘・渡邉由美子監訳『**科学立国のための大学教育改革―エビデンスに基づく科学教育の実践**』（A5判・三〇〇頁・四六二〇円）ノーベル賞受賞者ワイマン博士が、米国とカナダの大規模大学で行った実証研究の成果を紹介。理系の学士課程教育を各分野に根ざした「科学教育イニシアティブ」で変革する取り組み。

中央大学出版部

▼関野満夫著『**日本の戦争財政―日中戦争・アジア太平洋戦争の財政分析**』（A5判・二七六頁・三三〇〇円）日中戦争・太平洋戦争を遂行した日本戦争財政を総合的に解明。戦争財政の国際比較、臨時軍事費特別会計による戦争支出、戦時期経済成長、戦時大増税と国民負担、膨大な戦時国債発行消化の実態、敗戦後財政と超インフレを分析する。

▼山内惟介著『**国際会社法研究　第二巻**』（A5判・四九六頁・予価六六〇〇円）破産宣告前に破綻会社取締役が債務を履行して会社財産を減らしてもよいか、居住移転の自由を認めるEUで会社が実際の本拠を設立国に残したまま法人格を維持して法人住所を他国に移転できるか。EUの立法機関は越境移転をどのように規制しようと考えたか等を検討する。

▼武智秀之著『**行政学**』（A5判・四〇八頁・予価四四〇〇円）本書は分権化、広域化、民営化、規制緩和、組織再編、公務員制度等の制度改革を分析し、組織理論を駆使して制度と管理の技術的な把握を行う。権力と技術、分業と調整のテーマで体系化・理論化を試みる力作。

東京大学出版会

▼隈研吾編『**くまの根―隈研吾・東大最終講義10の対話**』（A5判・四二四頁・三三〇〇円）建築家・隈研吾の創作のルーツが明らかにされる。東大安田講堂でおこなわれた最終連続講義「工業化社会の後にくるもの」を待望の書籍化。

▼三中信宏著『**読む・打つ・書く―読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々**』（四六判・三六八頁・三〇八〇円）研究者を生業としながら、数多の本を読み、メディアで書評を打ち、数々の本を書いてきた著者からの熱きメッセージ。

▼田中久美子著『**言語とフラクタル―使用の集積の中にある偶然と必然**』（A5判・三四四頁・四四〇〇円）どんな時代の、どんな言語の、どんなジャンルでも成り立つという「統計的言語普遍」を検証し、人間の記号使用の深奥に迫る。

▼渡辺浩著『**明治革命・性・文明―政治思想史の冒険**』（A5判・六四〇頁・四九五〇円）奇跡のように安定していた徳川体制は、なぜわずか四隻の米国船渡来をきっかけに崩壊し、政治・社会・文化の大激動が起こったのか。驚きに満ちた知的冒険の書。

東京電機大学出版局

▼リチャード・F・ライオン著　根本幾・田中慶太訳『**ヒトの耳　機械の耳―聴覚のモデル化から機械学習まで**』（A5判・六八八頁・一三二〇〇円）聴覚系や脳が音を処理する理論をモデル化し、それをコンピュータや機械で活用する方法を解説。機械聴覚の土台となる基礎科学と、効率的なシステム構築法について詳解。補聴器や音楽情報検索、自動音声認識など、機械学習への応用例も解説。

▼張建著『**中国の教育格差と社会階層―中等教育の実像**』（A5判・二一六頁・三九六〇円）大規模な質問紙調査の量的分析を通じて、中国都市部における社会階層間の教育機会配分と、そこに生じる格差の形成メカニズムを読み解く。大規模な社会調査が規制されている現在、本書は貴重な資料となる。義務教育と高等教育をつなぐ後期中等教育を対象にすることで新たな視座を提示。

▼海本浩一編著『**臨床工学テキスト　生化学―代謝**』（B5判・二一六四頁・二六四〇円）臨床工学技士を目指す学生を対象に、「代謝」に関する最小限の知識をわかりやすくまとめたテキスト。

法政大学出版局

▼F・ガタリ／S・ロルニク著　杉村昌昭・村澤真保呂訳『**ミクロ政治学**』（四六判・六七〇頁・五九四〇円）一九八二年、軍事政権と民主化を求める民衆が対立するブラジルで行なわれたガタリの講演、討論会、インタビューなどを収録。

▼杉山一夫著『**パチンコ**』（四六判・三七二頁・三五二〇円）かつて大衆娯楽の王様といわれたパチンコは、いつ、どのように誕生したか。著者が蒐集したパチンコ台ほかの遊技機、映画、文学、写真、新聞、特許資料、関係者の証言等を駆使して明らかにしたパチンコ史の決定版。

▼A・パジェス著　吉田典子・高橋愛訳『**ドレフュス事件―真実と伝説**』（四六判・二八二頁・三七四〇円）文書改竄、証拠捏造で国家が真実を隠蔽し、冤罪を作り出す。実際に起きた事件を多角的に検証、現在の我々の問題として省察する。

▼洪郁如著『**誰の日本時代―ジェンダー・階層・帝国の台湾史**』（四六判・三〇六頁・三〇八〇円）日本による植民地統治は、台湾の人々の生活とその戦後をどのように規定していったのか。個人史と家族史を中心に新たな視座を提供する。

武蔵野大学出版会

▼佐藤佳弘・スマイリーキクチ共著『**ネット中傷　駆け込み寺**』（A5判・二四八頁・一八〇〇円）『脱！スマホのトラブル』『脱！SNSのトラブル』『インターネットと人権侵害』などの著者である佐藤佳弘先生（武蔵野大学名誉教授）と、タレントのスマイリーキクチ氏が、ネットの中傷の現状とトラブルに巻きこまれた際の対応策を、親しみやすいイラストと共に解説する。

◎YouTubeで解説動画配信中！

【検索ワード】武蔵野大学出版会KAWARABAN

▼阿部和穂著『**薬名【語源】事典**』（B5判・七六〇頁・六八〇〇円）その薬はなぜその名前がついたのか？「語源」「歴史」「エピソード」から薬名の由来を解説。日本の医薬品1321点を網羅した、薬剤師国家試験対策にも最適な一冊。

武蔵野美術大学出版局

▼三浦明範＋吉川民仁著『**絵画の表現**』（B5判変型・二一二頁・三五二〇円）絵は本来、モチーフや画材、テクニックなどにとらわれることなく、描きたいように描いてよいものである。しかし、ただ描くだけではなく、絵画によって何事かを表現し、見る者に伝えようとするならば、描く以前にさまざまな観察を通して思考を積み重ね、リアリティを伴ったイメージを膨らませることが重要となる。

本書では、絵画による表現に必要な観察、明暗、色彩、空間、構図、モチーフ、テーマなどの要素について、基本的な知識が得られるとともに、思考のきっかけとなるような問題提起がなされている。それらを受けてどのように描くのかは、描く者次第。それぞれの考え方が、多様な絵画の表現へとつながっていく。

アートの本質を理解し、絵画で表現するためのものの見方、感じ方、考え方を身につけた美の探求者をめざす人たちにおくる、具象と抽象、一見まったくスタイルの異なるふたりの画家による、絵画の表現の核心に迫る実践的考察。参考作品のカラー図版を多数掲載。

明星大学出版部

▼須藤康介『**教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで―第2版**』（四六判・二七〇頁・一九八〇円）本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本当で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当だとしたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。

▼神林寿幸・樋口修資・青木純一『**背景と実態から読み解く教育行財政**』（A5判・三四〇頁・二九七〇円）本書は豊富な資料、データをもとに背景と実態に着目しながら日本の教育行財政制度を詳細に解説する。初学者に加えて、教育行財政を専攻し、学位論文執筆にむけて研究テーマを探している、あるいは関連事項の理解を深めたいという学生、大学院生や教育行財政制度について学びたいという教育関係者におすすめしたい。

早稲田大学出版部

※「早稲田新書」（昨年十二月創刊）

▼加藤諦三著『**生きることに疲れたあなたが一番にしなければならないこと（早稲田新書1）**』

▼森永邦彦著『**AとZ　アンリアレイジのファッション（早稲田新書2）**』

▼小山鉄郎著『**村上春樹の動物誌（早稲田新書3）**』

▼濱田政則・小長井一男・清野純史・鈴木智治・三輪滋・鈴木乃里子著『**国境なき技師団スマトラ島から東北へ　災害復興支援の15年（早稲田新書4）**』

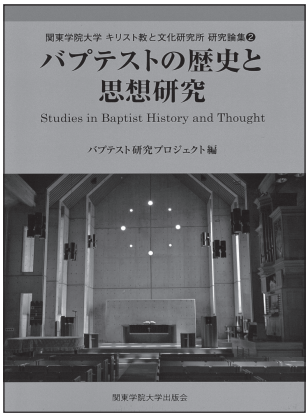
▼山岸剛著『**東京　パンデミック　写真がとらえた都市盛衰（早稲田新書5）**』

▼田村修一著『**凛凛烈烈　日本サッカーの30年　人は、プレーは成熟したのか（早稲田新書6）**』

（各巻　新書判・税込価格九九〇円）

関東学院大学出版会

▼バプテスト研究プロジェクト編『**バプテストの歴史と思想研究②**』（A5判・一二〇頁・一五四〇円）ドイツ・バプテスト教会史の研究、また英国初期女性説教者の研究、日本のバプテスト教会が見落としていた「献児式」の研究、日本の過去のバプテスト史研究には欠かせない教団成立時の他教派教会の動向を探る研究など、興味深い研究成果の発信である。〈目次〉第1章　ユリウス・ケブナーとその「マニフェスト」（一八四八年）／第2章　初期バプテストの女性説教者の挑戦／第3章　日本基督教団の成立とバプテスト教会／第4章　バプテストの献児式



関西学院大学出版会

▼趙 怡著『**二人旅　上海からパリへ―金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学**』（A5判・五九二頁・六三八〇円）離婚復縁を繰り返しながら互いを相棒と認めあう数奇な作家夫婦の関係を一次資料に基づき考察。多くの未発表作品と新事実を発掘。

▼桑原志帆・越仲舞・田中真央・西岡彩音著　關谷武司監修『**私たちが勉強する意味―最高に楽しかったブラックゼミ**』（A5判・一九八頁・一七六〇円）2年半にわたって、大学生が勉強する意義を本気で議論。その中での葛藤や成長を赤裸々に綴ったアカデミック版青春奮闘記。

名古屋大学出版会

▼池上俊一監修『**原典イタリア・ルネサンス芸術論**』上・下（A5判・五二四頁／五〇六頁・各九九〇〇円）西洋芸術が華やかに開花したそのとき、美術家や知識人は何を考え、どのような言葉を交わしていたのか。ほぼ本邦初訳の貴重なテクストから成る待望のアンソロジー。上巻には、絵画・彫刻・建築・工芸論など、下巻には、文学・音楽・演劇論など収録。

▼田中智晃著『**ピアノの日本史―楽器産業と消費者の形成**』（A5判・四〇〇頁・五九四〇円）富裕層の物であったピアノが人々に親しまれるようになった由来を、明治～現代の歴史から辿り、その普及を可能にした意外な原動力を示す。斜陽産業化の危機を超え、音楽教室とともに世界へと拡がった楽器産業の全体像を描く。

▼吉澤剛著『**不定性からみた科学―開かれた研究・組織・社会のために**』（A5判・三二六頁・四九五〇円）科学にはさまざまな次元で「モヤモヤ」がつきまとう。不確実性・偶然性・規範性などの避けがたい不定性と向きあい、科学のリアルを捉え直すことで、知と未知への態度を鍛えるポストコロナへの学問論。

名古屋外国語大学出版会

▼石田聖子・白井史人編『**世界は映画でできている**』（A5判・三五〇頁・二二〇〇円）「読書人」書評でも大好評。世界中から選りすぐった古典的名画、異色作、人気作、新作の数々。文化論や言語学、音楽等の専門家による映画史と精密な分析は圧巻。映画の見方が変わる。

▼シンジルト・千田徹朗編著『**牧畜を人文学する**』（A5判・三五四頁・二二〇〇円）増刷出来。世界の牧畜の画期的なガイド研究書。アフリカ、ユーラシア、アジアの牧畜民の歴史、近代国家との軋轢、独自の風習や文化などを現地取材。多数の図版、写真、地図を含む。

▼**近刊案内（年内刊行予定）**

『**現代ヨルダン・レポート**』佐藤都喜子著。アラブの女性たちが語った文化、差別、難民問題。『**高校生のために（仮）**』名古屋外国語大学出版会編。世界の言語をどう生かし、どう生きるかのヒントがいっぱい。『**ドストエフスキーの想像力（仮）**』亀山郁夫・望月哲男・番場俊・甲斐清高編。国際シンポジウムの成果を結集。『**世界文学の小宇宙2（仮）**』沼野充義・藤井省三編。傑作短編集第二弾。

京都大学学術出版会

▼黒田末壽・西江仁徳編『**新・動物記**』刊行開始。動物に魅せられた若者たちがその姿を追い求め、彼らの世界に少しでも近づこうとする過程を描いたドキュメンタリー・シリーズ。幸島司郎氏・山極壽一氏推薦。各四六判。隔月配本。◎**初回配本**（2冊同時発売）＝齋藤美保著『**キリンの保育園―タンザニアでみつめた彼らの仔育て**』（第1巻 二四六頁・二四二〇円）、竹内剛著『**武器を持たないチョウの戦い方―ライバルの見えない世界で**』（第2巻 二四四頁・二四二〇円）。◎**第2回配本**（8月発売予定）＝坂巻哲也著『**隣のボノボ―集団どうしが出会うとき**』（第3巻 二九六頁・二四二〇円）。

▼プルタルコス／城江良和訳『**英雄伝6**』（四六判変型・六八四頁・五五〇〇円）本冊には、プラトンの影響のもと、独裁の打倒を企てたディオンとブルトゥスらの伝記に加え、総索引も収録する。『**西洋古典叢書**』版プルタルコス『**英雄伝**』全6冊（セット価格二八八二〇円）ここに完結。原文に則しながらも読みやすい訳文を、細部にまで行き届いた訳註とともにお届けする。

大阪大学出版会

▼高橋文治著『**元好問とその時代**』（A5判・四一八頁・六二七〇円）元号が華北から消失し国体すらも中国から失われかけた金元交代期、国家の危機に直面した知識層が描いた時代像。

▼岡本紀子著『**立原道造　風景の建築**』（A5判・三二六頁・三九六〇円）詩人建築家である立原道造の創作活動を追いながら、浅間山麓の芸術家村構想の建築設計や浦和の週末住居《ヒアシンスハウス》に関する図面を詳細に分析し、それらに内在する詩的イメージとともに立原の建築志向を探究する。

▼細谷裕著『**湯川秀樹博士と大阪大学ノーベル賞はかくして生まれた**』（A4判変型・一一六頁・二六四〇円）ノーベル賞受賞論文はどのように書き上げられたのか。「素粒子の相互作用について」で学位取得した大阪帝国大学時代の二六～三二歳の若き湯川が明らかに！　新たな史料、講演原稿、論文の下書き等とともにフルカラーで紹介。

関西大学出版部

▼黒田勇著『**メディア　スポーツ　20世紀―スポーツの世紀を築いたのは、スポーツかメディアか**』（A5判・二八四頁・一六五〇円）ご好評につき第二刷刊行・20世紀前半を彩ったスポーツイベントに焦点をあてる。スポーツイベントの誕生と発展には、新聞やラジオなどのメディアが大きな役割を果たし、さらにその初期段階から電鉄の郊外開発や宗教的な情熱も関わっていたことを明らかにする。

▼井谷聡子著『**〈体育会系女子〉のポリティクス―身体・ジェンダー・セクシュアリティ**』（A5判・二六八頁・二二〇〇円）ご好評につき第三刷刊行。なでしこジャパン、女子レスリング…かつて「男の領域」とされたスポーツで活躍するたくましい「女性アスリート」たちはどう語られ、それをどう受け止めたのか。「体育会系女子」の言説、アスリートとしての誇りとジェンダー規範の衝突に迫る。

九州大学出版会

▼堀賀貴編『**古代ローマ人の都市管理**』（四六判・二九八頁・一九八〇円）中央ローマの為政者のリスク管理と、地方都市ポンペイでの下水道や交通等のインフラ整備とは？　古代都市のリアルに迫る。

▼増崎英明編著　長崎大学地域文化研究会著『**今と昔の長崎に遊ぶ**』（A5判・三三〇頁・二六四〇円）様々な分野の研究者が、長崎の隠された魅力をさらに深く探求する。

▼陳陸琴『**中国語の「主題」とその統語的基盤**』（B5判・一九〇頁・五九四〇円）Predication関係を仮定することによって、「主題」をめぐる様々な現象を説明。〈九州大学人文学叢書18〉

▼草野健一郎・水田洋司・二宮公紀・今泉暁音訳『**現代語訳　石造アーチ設計法**』（A5判・二一二頁・六三八〇円）石造アーチ設計の入門書を現代語に翻訳。

▼C・A・J・アペロ、D・ポストマ著中川啓監訳『**環境保全のための地下水水質化学（上／下）―地球化学、地下水および汚染―**』（B5判・三七二頁／三六〇頁・各六六〇〇円）水文地球化学において権威ある解説書の待望の翻訳。

編集後記

▼本誌が刊行されるころには緊急事態宣言下、無観客の東京オリンピックが開催されていることになる。大会期間中の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策、また開催決定にいたる政治過程については今後さらなる検証が求められるところであるが、元来アマチュアの祭典であったオリンピックと大学は、歴史上とうぜん密接な関係をもつ。

▼本特集でもふれられているように二〇一六年リオデジャネイロ大会における日本人選手の三分の二以上が大学生および大学卒業生であった。大学出版部協会加盟校も多くのオリンピアンを輩出しており、各校のHPには在学生および卒業生の代表選手団選抜を祝福する文言が並ぶ。

▼しかし、全学生の八～一〇％と推測される大学体育会所属アスリートたちのことをわれわれはどれだけ知っているだろうか。あるいは大学で行なわれているスポーツ研究はどうだろう。本特集が、大学スポーツの現在を知るきっかけとなれば幸いである。

ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 https://www.dynic.co.jp
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 http://www.p-taihei.co.jp
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 https://www.p-taiyosha.co.jp
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 https://www.takeo.co.jp
㈱東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 https://www.toko-ai.com
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 https://www.talligent.jp
図書印刷㈱	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700 https://www.tosho.co.jp
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 http://www.nissinkoukokusya.com
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 https://www.nikkei.co.jp
日本宣伝販売㈱	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 http://www.nihon-senden.jp
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 https://www.hakuhodo.co.jp
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 https://www.fujiwara-i.com
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 http://www.heibun.co.jp
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 https://www.mainichi.co.jp
誠製本㈱	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952 http://www.makoto-seihon.com
名鉄局印刷㈱	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23 TEL 052-561-3272 http://www.meitetukyoku.co.jp
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 http://www.yubun.co.jp
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 https://www.yomiuri.co.jp

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749 https://www.asahi.com	
亜細亜印刷㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858 http://www.asia-p.co.jp	
㈱アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360 https://www.abel-sha.com	
尼崎印刷㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122 http://www.amain.co.jp	
㈱ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627 http://www.adv-logi-eng.co.jp	
王子製紙㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072 https://www.ojipaper.co.jp	
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281 http://www.bunmeisha.co.jp	
城島印刷㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102 https://www.kijima-p.co.jp	
㈱粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811 http://www.kumekawa.jp	
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001 https://www.crimsonjapan.co.jp	
港北出版印刷㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201 http://www.kohoku.co.jp	
三松堂㈱	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360 https://www.sanshodo.co.jp	
三美印刷㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131 https://www.sanbi.co.jp	
三立工芸㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171 https://www.sanritsu-net.co.jp	
三和印刷㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300 http://www.sanwaprinting.jp	
信濃印刷㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601 http://www.shinano-insatsu.co.jp	
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185 http://www.bunsenkaku.co.jp	
㈱眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181 https://www.shinkousha.co.jp	
新日本印刷㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611 https://www.sinnihon.net	
㈱精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021 https://www.seikosha-p.co.jp	
創栄図書印刷㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288 https://www.soei-pb.co.jp	
大同印刷㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 https://www.daidou-jp.com	

郷土史大系

「生活や暮らしの場としての郷土」の視座から読み解く，
テーマ別日本史。シリーズ刊行中！

各B5判

第1回配本

宗教・教育・芸能・地域文化

吉原健一郎・西海賢二・滝口正哉 編
440頁　定価16500円
おもにその精神的・文化的側面を取り上げる。

第2回配本

情報文化

松永昌三・田村貞雄・栗田尚弥・浦井祥子 編
488頁　定価17600円
情報を人間社会を成り立たせる文化として多角的にとらえる。

第3・4回配本

生産・流通

阿部猛・落合功・谷本雅之・浅井良夫 編
さまざまな生産業・流通業が，どのような土地で生まれ，どのように発展していったのかを産業別に具体的に解説。

（上）―農業・林業・水産業―

484頁　定価17600円

（下）―鉱山業・製造業・商業・金融―

432頁　定価16500円

第5回配本

観光・娯楽・スポーツ

竹内誠・白坂蕃・新井博 編
456頁　定価17600円
日本人の余暇行動をとらえ，それらの産業・文化としての発展を地域の事例から解説。

最新刊

領域の歴史と国際関係（上）・（下）

（上）定価16500円
（下）定価18700円

朝倉書店　〒162-8707 新宿区新小川町6-29 TEL03-3260-7631 FAX03-3260-0180
http://www.asakura.co.jp　eigyo@asakura.co.jp

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

◉北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

◉弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町 1 番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

◉東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

◉流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

◉聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

◉慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

◉専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

◉玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

◉中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

◉東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

◉東京電機大学出版局
〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番
TEL 03-5284-5385　FAX 03-5284-5387

◉法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

◉武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町 1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

◉武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

◉明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-591-9254

◉早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

◉関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

◉名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

◉名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

◉京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

◉大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

◉関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

◉関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

◉九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜 3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ 305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160

◉大阪経済法科大学出版部（休会）
〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

大学出版127号（2021年夏）

2021年8月1日発行
頒価 100円（〒共）

［発行所］
一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

［表紙デザイン］奥定泰之

［表紙写真］
野球の一場面、本塁をめぐるクロスプレー

＊季刊「大学出版」は、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます